



主 催

特定非営利活動法人 ハッピーロードネット

後 援

在ベラルーシ日本国大使館・福島県・福島県教育委員会・福島民報社・福島民友新聞社

STAFF

団 長	西本 由美子	(NPO 法人 ハッピーロードネット 理事長)
副 団 長	桑折 淳	(磐城高等学校 教諭)
副 団 長	高村 泰広	(新地高等学校 教諭)
副 団 長	古澤 晃	(ベラルーシ国立大学教授 通訳)
事務局 長	山崎 建見	(㈱山崎工業 代表取締役)
Aアドバイザー	辺見 祐介	(福島民友新聞社 ふたば支局長)
Bアドバイザー	田代 真久	(福島民報社 南相馬支社)
Cアドバイザー	石塚 晃輔	(前田建設工業㈱ 東北支店)
Dアドバイザー	吉田 学	(㈱タイズスタイル 代表取締役)
Eアドバイザー	開沼 博	(立命館大学 准教授)
撮 影	松本 淳	(Five Star 代表 映像作家)
チーフアシスタント	カーチャ・チハミロヴァ	(通訳)
事 務 局	鯨岡 秀子	(NPO 法人 ハッピーロードネット 副理事長)
	石附 諭	(NPO 法人 ハッピーロードネット 専務理事)
	吉田 憲一	(NPO 法人 ハッピーロードネット 理事)
	佐藤 悠介	(原町高等学校 教諭)
	橋本 妙子	(音楽の杜 代表)

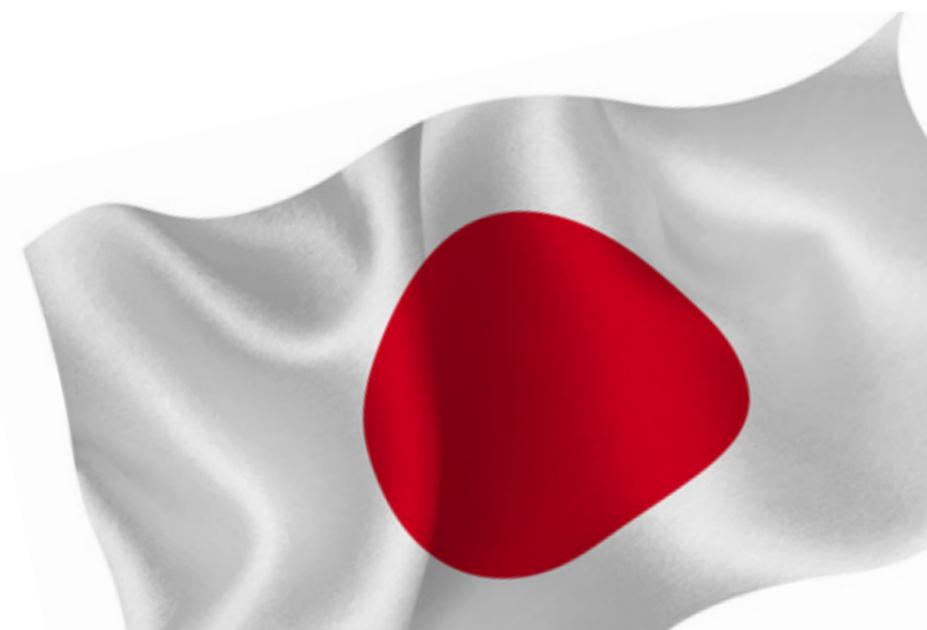


2018

日本・ベラルーシ友好訪問団
「30年後の故郷に贈る」

Belarus Mission → Japan Mission

事業報告書





ごあいさつ

今年もベラルーシの現状を調査したい！

1986年チェルノブイリ事故で放射能汚染の被害を受けたベラルーシの地域の現状を調査、取材するために日本とベラルーシの友好訪問団（主に福島県浜通りの中高生たち）を結成して現地を訪問し、交流を通じて放射線の現状を調査しました。

福島に生まれ、本気で福島を復興させたい！現地の学校で子供たちと交流し、事故以降、ベラルーシの歩んだ道を辿りました。

2018年、中高生によるベラルーシ訪問団を結成して、さらに放射線の影響やその実態について学生たちの目を通して「放射線を知る、学ぶ」のプロジェクトを始動しました。

福島の復興に向けて、「線量の安全性に疑問を持つ人々に直接わかりやすく伝える」「放射線や放射性物質に関する知識を身につける」「放射線教育を充実させることによって、誤解と偏見をなくし風評被害を防ぐ」などの取り組みを広げていくことが今後の課題です。

今年はベラルーシと日本、この2カ国の交流を通じて、ベラルーシミッションと日本ミッションとして意見を出し合い、多くの子供たちが学びます。

福島の復興にはまだ長い道のりがあります。放射線への知識を子供たちが知って、そして正しい知識を未来に繋げていく。これがこのプロジェクトのコンセプトなのです。

特定非営利活動法人 ハッピーロードネット
理事長 西本 由美子

開催目的

福島の復興のために活躍する広い見識を持った次世代のリーダーを育成することを目的とします。

ベラルーシミッション3つの課題

- ① 原発事故で放射能汚染の被害を2受けたつの地域の現状を調査する。
- ② 「日本」「福島県」のことをベラルーシの皆さんに伝える。
- ③ 福島の復興に役立てることが出来る何かを持ち帰る。

5つの誓い

1. 何事にも興味を示し、積極的に行動します
2. 集団生活であることを理解し、ルールを守り行動します
3. 日本人として誇りを持った行動をします
4. だれにでも笑顔で挨拶をします
5. 多くを学び、成長して元気に帰国します

Content

ごあいさつ	1
開催目的	2
ベラルーシミッション	4
日本ミッション	10
日本・ベラルーシ友好訪問団 2018 報告会	
事業報告(ベラルーシミッション報告)	13
事業報告(日本ミッション報告)	15
学生プレゼンテーション	16
パネルディスカッション	19
御礼の挨拶、閉会の挨拶	24
参加生徒 感想文	25
新聞記事	43



ベラルーシミッション

7/23
(月)

- ・道の駅ならは集合 出発式
- ・道の駅ならは出発



- ・成田空港第1ターミナル到着
 搭乗手続き 出国手続き
- ・成田空港出発 EY871 便
 所要時間:11 時間 50 分



7/24
(火)

- ・アブダビ空港到着
 乗継時間:6 時間 55 分
- ・アブダビ空港出発 EY061 便
 所要時間:5 時間 50 分
- ・ミンスク第二空港到着
- ・ミンスク第二空港出発
 ※バスで昼食(軽食)
- ・ホテル到着 チェックイン
- ・ホテル出発 ミンスク観光
 (図書館、広場等)
 ショッピングセンター
- ・ホテル到着
- ・夕食(ホテル)



- ・ミーティング(会議室)
 オリエンテーション
 学生アシスタントプレゼンテーション
 高校生プレゼンテーション
 (全班)



7/25 (水)

- ・ホテル出発
- ・ゲームストリーム社訪問



- ・子供保養施設ブラレスカ到着
昼食(ブラレスカ)
- ・所内見学



- ・プレゼンテーション(D班)
日本文化紹介



- ・夕食(ブラレスカ)



7/26 (木)

- ・朝食(ブラレスカ)
- ・見学ツアー(ブラレスカ内)
- ・交流事業
(施設が準備したプログラムを実施)
- ・昼食(ブラレスカ)
- ・子ども保養施設ブラレスカ出発
- ・国立ゴメリ大学到着



- ・開沼博講演会
「福島の実状と課題、復興に向けての取組み」



- ・夕食(レストラン・イリーナ)
- ・ミーティング(会議室)
振り返り、ゴメリ研修について
プレゼンテーションについて



7/27 (金)

- ・ホテル出発
- ・ゴメリ州執行委員会到着
局長、副局長講話
- ・昼食(レストラン・ファンソリ)



- ・国立ゴメリ大学到着
アヴェリン教授講義
プレゼンテーション(B、C、E班)
- ・ホテル到着



- ・夕食(ホテル)
- ・ミーティング(会議室)
振り返り、ホイニキ研修について
プレゼンテーションについて



7/28 (土)

- ・ホテル出発
- ・ホイニキ地区博物館見学



- ・慰霊碑到着 献花
- ・ポレーシエ放射線環境保護区
ゲート前



- ・ストレリチェボ中学校訪問
プレゼンテーション
(放射線クラブ、A班)
交流事業、ソーラン節
- ・ストレリチェボ中学校出発
- ・ホテル到着
- ・夕食(ホテル)



- ・夕食(ホテル)



7/29 (日)

- ・ホテル 出発
- ・ハティニ 到着
- ・ハティニ 出発
- ・昼食 (レストラン・ガンプリヌス)
- ・ホテル 到着

・前半 (A,B) 後半 (C,D,E) に分かれて戦争博物館見学



- ・講話 1
(日本人バレーナ大野麻佑子さん・会議室)
- ・夕食 (ホテル)
- ・ミーティング (会議室)
振り返り、プレゼンテーションについて



7/30 (月)

- ・ホテル 出発
- ・ネスヴィシ城 到着 見学
- ・昼食 (ネスヴィシ城内レストラン)
- ・ネスヴィシ城 出発
- ・ホテル 到着

・講話 2
(チェルノブイリ対策局 職員講話・会議室)

- ・ホテル 到着
- ・夕食
- ・ミーティング (会議室)
振り返り、プレゼンテーションリハーサル



7/31 (火)

- ・ホテル 出発
- ・マナストゥイルスキーホテル 到着
プレゼンテーション準備
- ・福島県浜通り 高校生プレゼンテーション

- ・マナストゥイルスキーホテル 出発
- ・昼食 (レストラン・ドゥルジヤ)
- ・ホテル 到着、イベント準備
- ・ホテル 出発

- ・ショッピングセンター 到着
会場設営
- ・イベント開始
ソーラン節披露→日本文化紹介→
ソーラン節披露
- ・イベント終了 会場撤収

- ・ショッピングセンター 出発
- ・ホテル 到着 夕食 (ホテル)



8/1 (水)

・講話 3
(日本大使館 徳永大使・会議室)

- ・ホテル 出発
生徒：ミンスク市内自由散策
スタッフ：国会訪問
国会議員との対談

- ・ホテル 到着
- ・ホテル 出発
- ・夕食 (ドゥルジヤ)
- ・ホテル 到着



8/2
(木)

- ・朝食 (ホテル)
- ・チェックアウト
- ・ホテル 出発
- ・ミンスク第二空港 到着
- ・ミンスク第二空港 出発
EY062 便
所要時間 :5 時間 40 分
- ・アブダビ空港 到着
乗継ぎ時間 :1 時間 55 分
- ・アブダビ空港 出発
EY878 便
所要時間 :9 時間 55 分



8/3
(金)

- ・成田空港 到着
- ・成田空港第 1 ターミナル 出発
- ・いわき駅
(ミスタードーナツいわき駅前店前)
- ・道の駅ならは 到着



日本ミッション

『ベラルーシ大学生 日本滞在記』

10/4
(木)

- ・成田 到着
- ・広野町役場 表敬訪問

10/5
(金)

- ・稲刈り体験 (楳葉町 松本淳 宅)
- ・写仏体験 (楳葉町 大楽院)
- ・和太鼓体験 (広野体育館)
広野昇龍太鼓

10/6
(土)

10/8
(月)

- ・日本ミッション

10/9
(火)

- ・スパリゾートハワイアンズ
- ・磐城桜が丘高校訪問
箏曲部見学、弓道体験

10/10
(水)

- ・ジブリの森美術館

10/11
(木)

- ・帰国



10/7
(日)

・グループワーク(午前の部)
報告会に向けて準備



・医学博士 坪倉正治氏講義
テーマ
「福島原発事故後の放射線対策は
世界にどう見られているか
～国際機関の現場から～」



・グループワーク(午後の部)
報告会に向けて準備
・報告会予行演習



・ミーティング



10/8
(月)

・J-ヴィレッジ到着



・報告会リハーサル



・開場
・報告会
・片付け



・解団式



日本・ベラルーシ友好訪問団 2018 報告会

- 開催日時 平成 30 年 10 月 8 日(月) 開会 10:00
- 開催会場 J-ヴィレッジ コンベンションホール

- | | | |
|----------|------------|---------|
| 1. 開会の挨拶 | 副団長 | 高村 泰宏 |
| 2. 来賓挨拶 | 前復興大臣衆議院議員 | 吉野 正芳 様 |
| | 参議院議員 | 森 まさこ 様 |
| | 広野町長 | 遠藤 智 様 |

3. 事業報告

■ベラルーシミッション報告 (平成 30 年 7 月 23 日～ 8 月 3 日)

発表
高校生

- 伏見 若菜 (新地高校)
- 酒井 郁澄 (相馬高校)
- 佐藤 勇志 (相馬東高校)
- 金澤 舞 (原町高校)
- 真田 未夢 (原町高校)

●なぜ、ベラルーシか？

32 年前の 1986 年に事故を起こしたチェルノブイリ原発はベラルーシの南隣のウクライナ北部にあり、当時の風向きの影響で放射性物質の 70%はベラルーシ側に降り注ぎ、放射能汚染の被害を受けたベラルーシの現状を見るため、単なるベラルーシ観光ツアーではなく、汚染が最も酷かった南部のゴメリ州内の関連施設や学校も含めて訪問し、現地の方々との交流を通じて学びました。

訪問の目的

1. 「日本」と「ベラルーシ」の現状を調査する。
2. 「日本」と「福島」のことをベラルーシの皆さんに伝える。
3. 「記憶の伝承」と「リーダーシップ」を考える。



■ベラルーシミッション報告

●ベラルーシとはどんな国か。

- ・日本では急ピッチで除染が行われましたが、ベラルーシではチェルノブイリ原発事故後、消えてしまった村があり除染もされていませんでした。
- ・一方、ベラルーシでは 30 年以上経ってもチェルノブイリ対策局が国としての対策を続けていますが、日本の復興庁は 2020 年度末で廃止される時限組織であることを疑問に思います。
- ・ベラルーシでは家畜を連れて避難することができましたが、福島では殺処分という措置がとられたことを疑問に思います。
- ・ベラルーシでは 30 年以上、被災地域の子どものケアを継続しており、子ども保養施設「プラスカ」は国家が無償で運営しています。
- ・ベラルーシの学校では交通安全と同様に小学校から放射線教育が実施され、中学校では部活動として放射線を計測し地域にも情報発信するなど、以前は人が住めなかった地域で、今はどう安全に生活するかを学び実践しています。

原発事故だけではありません。

- ・第二次世界大戦の悲惨さを伝えるハティニ村の銅像に感銘を受けました。言葉がわからなくても見ただけで伝わる展示物が福島にもあったらいいと思いました。
- ・世界中で 1 億人以上が利用する人気のオンラインゲーム「World of Tanks」を制作するゲームストリーム社を訪ね、社長からリーダーシップとは何かを学びました。
- ・ベラルーシの人々にも福島の魅力を伝えるために行ったホテルでのプレゼンには 100 人もの参加者があり、またショッピングセンターで披露した「ソーラン節」も大勢の人たちが見てくれて嬉しかったです。

●まとめ

実際に見て、感じ、考えたことを自分たちの言葉で『伝えていく』ことが大切



■日本ミッション報告 (平成 30 年 10 月 6 日～ 10 月 8 日)

発表
高校生

小野内 舜 (相馬高校)
荒 彩乃 (新地高校)
坂本 穂香 (新地高校)
青田 美桜 (相馬農業高校)

● 10 月 6 日に行った 3 カ所の施設視察について

・中間貯蔵施設 (受入・分別施設) 視察

中間貯蔵施設でのロボットの導入は重要なポイントです。地元企業の育成につながり福島の新たな産業に影響をもたらすと思います。

中間貯蔵施設 1 か所で約 4 万㎡の除染土が貯蔵できると聞きましたが、県内で発生した 2000 万㎡の除染土を発生すると貯蔵するには単純計算で 500 カ所の施設が必要になるとのことなので、あまり現実的ではないと思いました。また、このような大量の汚染された土が国が約束した 30 年後に本当に県外で最終処分できるのか？疑問に感じました。



・リブルンふくしま 視察

リブルンふくしまとは「動かす、触る、遊ぶ」をコンセプトに汚染された廃棄物などの運び出しから埋立てまでの埋立処分事業の流れを体験しながら知ることができる施設です。

プロジェクションを使って実際に自分で楽しみながら学ぶことができ、廃棄物とその処理についての流れ学べるプロジェクトウォールやジオラマ展示があります。

このような施設を多くの人に知ってもらいたいです。年齢を問わず放射線についての知識をわかりやすく得ることができるからです。

子供たちは放射線についてあまり知らないと思うので、楽しく学べるこの施設にぜひ訪れて欲しいと思いました。



・福島第二原子力発電所 視察

原発敷地内は、イメージでは人が立ち入りできないほど線量が高いのかと思っていましたが、実際に測ってみると第二原発では 0.6 μSb/h と飛行機の線量 1.0 μSb/h と同等になることがわかり、思っていたより低いことがわかりました。

また、非常に備えて想定訓練や放射性物質を扱う施設や設備が整っていて、どれほど厳重に管理されているかを初めて見る事ができました。



最後に、中間貯蔵施設へ行く途中にある双葉町の風景を見て、まだ震災直後の状態でした。故郷に帰れない人もまだいます。

復興に時間がかかるかもしれませんが、自分がこの地域の力になりたいと強く感じました。



4. 学生プレゼンテーション

■ベラルーシ大学生によるプレゼンテーション

発表
大学生

アリーナ・シバエワ
ヤーナ・カルチェフスカヤ
タチャーナ・サクソノワ
ナターリヤ・ヤロシユク
エカテリーナ・チホミロヴァ
アナスタシア・グリネヴィチ

日本語学科で学ぶ 6 人のベラルーシの女子学生が美しい日本語で語りました。

私たちにとって 32 年前に起こったチェルノブイリの原発事故は歴史上の出来事のように感じていましたが、今回浜通りの高校生の皆さんと一緒に学んだことで、私たちもチェルノブイリ問題に興味を持つようになりました。

●事故当時、何が起こったのか。何を感じたのか。

私たちは、ベラルーシ南部の汚染地域ナロヴリャの町から首都ミンスクに移住した人たちが作った組織「移住者の会」の方に話を聞きに行きました。

事故当時、町では「火事が起こったらしい」という噂が流れました。だんだん軍人が多くなり戦争が始まったかのような様子でした。

当初、「子供は外に出さないほうがいい」と言われましたが、信じませんでした。ゴルバチョフ書記長の演説で原発事故を知り、3 歳未満の子どもは母親と一緒に、3 歳以上の子どもは母親と離れて避難しました。特に年寄りや自分故郷への愛着が強く、避難や移住を拒否する人が多かったそうです。

首都ミンスク市内には移住者のために作られたマリノフカという団地がありますが、事故直後にはミンスクに移住しても汚染地域の出身であると言うと、交際相手から別れを告げられた若い女性もいました。

●移住した人たちが住んでいたところは、どうなっているのでしょうか。

チェルノブイリ原発事故によりベラルーシの国土の 23% が汚染されました。放出された放射性物質の 70% がベラルーシに飛来したと言われており、原発のある現在のウクライナよりも被害が大きかったです。ベラルーシ南部のウクライナとの国境地帯に広がる約 2,160km²の「ポレーシエ国立放射線環境保護区」は、現在でも居住禁止になっていて特別な許可書がないと立ち入ることができません。一般の人たちの立ち入りも非常に難しいです。

しかし、毎年 4 月の終わりが 5 月の初めに年に一度の「ラドゥニツァ」という日があります。日本のお盆にあたるような日で、この時には今は人が住んでいない村にも入ることが許され、亡くなった人たちのを偲んで集まり、慰霊する日です。



■ベラルーシ大学生によるプレゼンテーション

今、新たな問題が発生しているのが、プルトニウムが崩壊してできるアメリカシウムによる汚染です。

原発事故直後の 1986 年 6 月、最も被害の大きかったゴメリ州に科学アカデミー放射線学研究所が設立され、農作物・畜産物への放射性物質の移行割合などを研究してきました。ポーシェ放射線環境保護区の中での国際的な研究機関の設立も予定されています。

●ベラルーシ人の健康について

「放射能汚染のことばかりお話しするとベラルーシ人の健康はどうなっているかと心配だと思いますが、私たちを見てください。私たちは元気です！」



ベラルーシでは国民に一年に一度の健康診断が実施され病気の早期発見につなげています。ベラルーシでは医療は無料になっています。ホールボディカウンターによる検査や甲状腺のエコー検査も受けられます。

汚染地域に住む子供達は年に 1 回無料で保養施設で過ごすことができます。「ブラレスカ」という小児リハビリ保養センターで、保養プログラムがあります。ここは自然も美しく、空気が綺麗なところなので、この施設で 24 日間過ごすことで子供達を守るプログラムです。滞在中も学校の勉強ができるように学校のような設備もあります。

健康の問題はチェルノブイリ原発事故のせいにするのではなく、科学的に研究していくことが必要だと思います。

健康を守るためにもう一つ重要なことがあります。それは農業です。

私たちの主食であるジャガイモの栽培は非常に盛んです。

そして、酪農も盛んです。ベラルーシの乳製品はとても美味しいです。

高校生の皆さんは食べたと思いますが、

「美味しかったですか？」

「美味しかったです」

チェルノブイリ原発事故によって農地が約 20% の農地がセシウム 137 で汚染されましたが、カリウム肥料の散布や畑を耕すなど除染が行われてきました。そして、その土地に合わせた作物を育てるようになりました。

また、作物を加工することで放射性物質を減らせることがわかりました。

例えば、穀物はアルコールに加工するとそのアルコールには放射性物質は残りません。また、原料の牛乳も放射性物質が含まれていても、それを加工して製造したチーズやバターには放射性物質が含まれないのです。市場や工場では念入りの放射性物質の測定が行われています。

高校生の皆さんが食べたチーズ工場では 3 回も放射性物質の測定が行われています。そうすることで、住民の健康が守られているのです。



放射性物質から身を守る上で、もう一つ重要なことがあります。

それは、住民に対する情報提供です。被曝を防ぐには知識が必要です。

しかし、野生のベリー類やキノコなど森の恵みからは放射性物質が検出されますが、線量を測って安全を確認すれば森の恵みも安心して食べることができます。

学校の中には放射性物質を測定するところもあります。高校生の皆さんが行ったストレリチェヴォ中等学校にも食品を測定することができます。子供達も汚染地域に住んでいても正しい知識があれば怖くないと言います。

■ベラルーシ大学生によるプレゼンテーション

●アンケート調査も実施しました。

「チェルノブイリ原子力発電所事故から 32 年後のアンケート調査」ということで、2018 年 9 月 20 日から 10 月 1 日にかけて、ベラルーシに住む人を無差別に抽出して調査しました。有効回答数 261 人。

「チェルノブイリの問題に興味があるか？」という問いに対しては、「はい」と答えた人が 68.7%、「いいえ」の 31.3% を大きく上回りました。

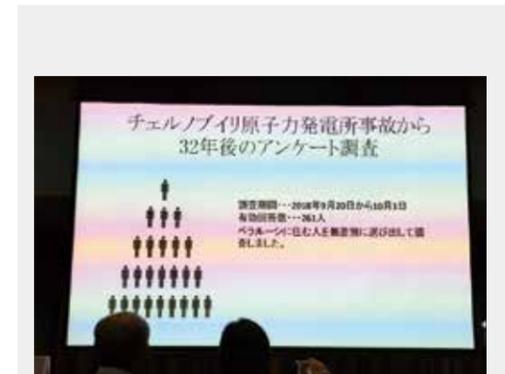
「汚染地域のあるゴメリ州の食品を食べますか？危険だと思いますか？」という問いに対しては、「危険だと思わないので、食べる」が 27.5%、「危険だと思うので、食べない」が 9.3% いるが、圧倒的多数は「食品の産地を気にかけていない」(63.2%) ということでした。

福島事故が起こった時、ベラルーシの人たちは自分のことのように心を痛めました。

アンケートでは「福島の事故についてどう思いますか？」という問いに対する自由記述の回答として、「また同じような事故が起こったことを非常に残念に思う」「日本の復興のスピードがベラルーシよりも早く感じる」「日本人がどのようにこの問題を解決していくかに興味がある」「チェルノブイリ事故の時と同様、デマがたくさん流れたことが気になる」などが挙げられました。

今回浜通りの高校生の皆さんに同行したことで、私たちも自分の国の起こった出来事について学ぶことができました。ベラルーシは原発事故の復興段階が終わって発展の段階に入っていると云われますが、事故の記憶を忘れていけないと思います。そして、悲劇を悲劇のまま終わらせないで、将来に役立てていければと思います。

そして、私たちも日本語を学んで、日本とベラルーシの架け橋になりたいと思います。



ベラルーシ大学生：「(Jヴィレッジの) ホテルからの海の眺めが素晴らしい、こんなに美しいところに津波が襲い、そのため原発の事故が起きたということが信じられず、混乱してしまいます」

5. パネルディスカッション

■テーマ(1)「記憶の継承」を考える

■コーディネーター 開沼 博(立命館大学 准教授)

参加
高校生

- | | |
|-----------------|----------------|
| 高瀬 優花(磐城高校) | 若松 桜花(平工業高校) |
| 中田 葵(磐城高校) | 荒川 祐太(磐城桜が丘高校) |
| 柴田 陽菜(磐城桜が丘高校) | 中丸 朋香(磐城高校) |
| 森谷 友星(ふたば未来学園高) | 杉本 咲樹(磐城桜が丘高校) |

● どのように継承するか?

・資料館や博物館をつくる(森谷くん)

2020年に双葉町周辺にできるアーカイブ施設。実際に震災の揺れを体験するコーナーもあるとよいのでは。写真や模型も重要だが、揺れを体験することで防災意識を育成。



・避難生活を体験できるような施設(柴田さん)

実際にどのくらいの人が体育館などにいたのか、寒さをしのいだか、食べ物がどのくらいあったのかなど再現する。



・現場を視察する(中丸さん)

第二原発を視察した。ただ危険だというイメージが変わった。そこで働いている人が喜んでくれた。



・VR、ARなど先端技術を使う(若松さん)

リブルンに行ってARで理解を深めることができる展示があった。



・SNSなどメディアを使うべき(中田さん)

震災時のACのCMの音楽などもあの時のことを追体験する。きっかけになる。映画やドラマなどを通して伝えていくことも必要。



・教育が大事(杉本さん)

小中学校での放射線教育、義務化されているが、あまり丁寧ではない。



・ハティニにあった銅像が印象に残った(中丸さん)

周辺のきれいな景色が訪れたい場所だった。



■テーマ(1)「記憶の継承」を考える

● 何を継承していけばいいのか?

・事故直後の風景(荒川くん)

自衛隊の車両、防護服の姿、放射線測定器が身近なところで売っている。



・状況を甘く見ずに適切に判断する大切さ(高瀬さん)

津波を下校中に体験した。



・精神的なのこりにくいものを残す(中田さん)

人の口から思いを伝えていく。大切な記憶を引き出すのは難しい部分もあるが、それでも大切。



・足りなかった物資など、どういう状況になるのか、という経験(杉本さん)

他の災害で生かされるようにしたい。



● 現にある地域課題の解決につなげるには?

・高齢化問題、地域の活性化なども支えていく(若松さん)



・観光客が来ることで地域の活性化をしていく(中田さん)

記憶の継承の施設にきてもらいつつ、商業施設などにも来てもらう。



・情報発信する人材を育てていく(高瀬さん)

皆の意見を聞いて、まとめていく。積極的にわからないことを聴く。



■テーマ (2) いま必要な「リーダーシップ」

■コーディネーター 開沼 博 (立命館大学 准教授)

参加
高校生

園部 裕士 (磐城高校)	山藤 広翔 (磐城高校)
山田 玲華 (磐城高校)	金成 李胡 (磐城桜が丘高校)
小松 晃己 (磐城高校)	芳賀 カ (磐城桜が丘高校)
矢口 晴夏 (ふたば未来学園高)	

●「リーダーシップ」には何が必要？

・聞く力 (山藤くん)

みな意見を聞いて、
まとめていく。
積極的にわからない
ことを聴く。



・責任感 (矢口さん)

中間貯蔵施設にある
ものを県外にもって
いく。



・胆力 (芳賀くん)

想定外の事態がおき
たときに堂々と対応
できるようにする。
経験を積む。予想す
る。想定外をなくす。



・環境をつくる (小松くん)

ゲームストリームで
の部下を活かす姿勢。
いま福島では、住民
が「生きる」ように
なっているのか。



・自分の信念をもつ (山田さん)



・決めたことをやり通す力 (園部くん)

18歳以下医療費無料
化されているが、い
つ終わるかかわらな
い。不安。住民の安
心につながっていく
ように方針を。



・目標設定 (金成さん)

日本とベラルーシの
除染の方法の違いを
知った。
目標を明確にする必
要がある。



■テーマ (2) いま必要な「リーダーシップ」

● どうリーダーシップ発揮していく？

・計画性 (金成さん)

計画をたてて、周りも
支えていく。



・視野の広さ (山藤くん)

リプルの埋立処分場
から帰る時、回り道
をした体験。
周辺住民との合意の
結果、そうだった。
色々な関係者の立場
にたって調整してい
くこと。



・大局観 (芳賀くん)

いざという時に、ど
う勝負するか。
その判断には多角的
な視野が必要。
話し合いが滞った時
に決めるのはリーダー
だが、その時に決め
られる。力を蓄える
必要がある。



・強い意志 (小松くん、矢口さん)

第二原発で聞いた、事
故直後の話。
皆で協力しあったこ
とが、いまにつながる。



■テーマ (2) いま必要な「リーダーシップ」

● いま福島にある課題を解決していくリーダーシップとは？

● 情報の共有 (園部くん)

知りたいことをしれない部分がある。発信をすることで帰還率など解決していく課題がある。



● 行動力 (山藤くん)

例えば、情報提供なら高校生にもできることはある。



● ふくしま愛 (小松くん)

「仕事のためにやっている」だといずれ離れていく。他県の人でも福島を思う気持ちがある人が必要。



● 気配り (金成さん)



● 柔軟さ (芳賀くん)

例えば、ベラルーシで女性が重要なポストにいた。女性にしかわからないこともある。多様な人がいることが重要。



● 全体を見渡せる力 (山田さん)

ベラルーシでは、日本の買い物難民の問題について紹介した。買い物難民の問題を解決するにも、色々な考え方を調整しなければならない。



6. 御礼の挨拶

● 団長 西本 由美子 (NPO 法人ハッピーロードネット 理事長)

このミッションは、新地町からいわき市の高校に通う子どもたちが参加しております。私たち大人が、この子たちに将来 30 年の負の遺産を残してはいけません！希望の遺産を残して未来へ繋げたい！大人としての役割とは。このリレーのバトンを渡したいということ、行政や企業、一般も、保護者も、私たちも一緒になって未来へ向けて考えていかなければならないと思います。教育は 1 年 2 年で出来ることではありません。時間をかけてこの子たちの成長と共に我々は頑張っていきたいと思えます。この福島県浜通りを住みやすい街にすること。これから未来の子供たちのために、地域の皆さん、行政や応援してくれる企業の方々と頑張っていきたいと思えます。今回のベラルーシ訪問は、浜通りの企業が旅費から滞在費、またこのような報告会まですべての資金を出してくださいました。日々、地元の子供たちは地元で育てましようとは私は口癖で言っています。それがこのような形で実現したことに、感謝しております。本当にありがとうございました。

私達はこの子供たちと浜通りの原発問題として未来を考える計画は 5 年計画で考えています。1 年目、2 年目はベラルーシに行ってきました。そこで放射線教育を学んできました。次は、浜通りにとって先程から子供たちが話題にした中間貯蔵施設を見せなければなりません。中間貯蔵施設研修はイギリスに行ってきます。そこで 2 年間学んできます。最後の 5 年目は最終処分場に子供たちを連れて行きたいです。

やはりこの浜通りに住むということは、廃炉を通してその過程を見て考えて、将来、自分達で原発問題は決めなくてはならない責任感を持っていくことが大切な学びになります。将来、この地域でいろいろな意味でリーダーシップのとれる大人になっていただきたいと思っておりますので、あと 3 年間、どうぞ皆さん、企業の皆さんもたくさんいるので私達を応援してください。

そして、どんどんこの子供たちが成長して、後輩たちを育ててほしいと思えます。

最後になりますが、このミッションの中心である古澤先生を改めてご紹介いたします。

このベラルーシミッションが成功したのは、先生のおかげなんです。彼は実は山形県の方なんです。彼は 18 年前にベラルーシ国立大学へ行って日本語を教える教授になって、たまたま私がご縁があって知り合って、彼がいたから子供たちとベラルーシに行き、いろいろなところへ何の不安もなく、ロシア語もわからない私たちが行くことができました。本当にありがとうございました。

私たちは来年もまたこういう機会を設けて頑張ります。

本当に皆さんありがとうございました。



7. 閉会の挨拶

● 副団長 桑折 淳 (磐城高等学校 教諭)

本日は、ご多忙中たくさんの方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

また、心温まる応援のお言葉や高校生への新たなご提案など様々なご意見を頂戴いたしまして大変感謝いたしております。本当にありがとうございました。

私たちが無事にこのような形で充実した継承を行えたのも皆様の支援の賜物と考えております。大変感謝いたしております。

そして、高校生たちがどのような成果を残したかということは、今回の発表会をご覧いただきまして十分ご理解いただけたかと思えます。

ただ高校教員といたしまして申し上げますと、これから先この子供たちが歩いていく道に、様々な障害にぶつかるかもしれません。その時にはこちらに来ていただいてお待ちしております皆様手を差し伸べていただき、大きく成長するようにご支援賜ればと考えております。本日はこのように充実した会が執り行えたことをとてもありがたく思っております。

以上をもちまして、「日本・ベラルーシ有効訪問団 2018 報告会」の一切を終了いたします。

ありがとうございました。

参加生徒 感想文（日本の高校生）

【A班】

● 園部 裕士（磐城高等学校）



■ベラルーシミッションを通して学んだこと

私がベラルーシミッションで学んだことの一つは、だれかと協力して何かを成し遂げることの達成感です。プレゼンを完成させていく過程で、例えば、先生方から指摘を受けた部分を修正するのか、または自分たちの大事な意見としてそのまま残すのか、修正するとしたらどのように修正するのか、残すとすればそれをどのように説明して納得していただくか、ベラルーシ滞在中も辺見さんを含めたメンバー全員で一つの部屋に集まって何度も話し合いながら作業を進めました。リハーサルの度に「今日はどんなことを言われるのだろうか、、、」と緊張しながらリハーサルしていました。最後のリハーサルでは、内容的な指摘がなかったのはとても安心しました。そして、いよいよプレゼン本番。始まるギリギリまでとても緊張していたのを覚えています。しかし、会場を盛り上げることができ、終わったあとにととても大きな拍手をもらった時には、とても感動して大きな達成感を得ました。いままで頑張ってきて本当に良かった！と思った瞬間でした。

二つ目は、急な変更やアクシデントにも柔軟に対応することの大切さです。私がベラルーシに行っている間も、バス会社が急に変わったり、予定が変更になったりと、前に決まっていたこととは違うようになることがたくさんありました。それに対応するために大切なことは、当たり前かもしれませんが、人の話をよく聞くことだと感じました。滞在中の変更は山崎さんから伝えられることが大体でしたが、しっかりと話を聞き、それをメモすれば、しっかりと変更にも対応できるのだなと感じました。期間中に、変更したスケジュールにも対応し、遅れずに時間を守って行動できたのは一つ自分の良かった点ではないかと思います。

三つ目は、文化の違いを受け入れることの難しさです。ベラルーシでは、どこでご飯を食べてもサラダから出されるのが一般的でした。日本でほとんど野菜を食べない生活を送っていた私は、この違いに最も苦しめられました。初めは、食べられないことも多かったのですが、しかし、不思議なことに後半にはほとんど食べられるようになりました。ベラルーシのサラダ文化に対応できたおかげで、その他の食事もとてもおいしくいただくことができました。その土地の食文化にいち早く慣れることが、海外生活ではとても大事なのだと学びました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私は今回の経験を通して、子供たちにもっと戸外で遊んでもらいたいというように思いました。私は、将来スポーツメーカーへの就職を希望しています。もし、仮に私が希望通りに就職できたとして私が福島に対してできること、それは適切な情報を子供やその保護者に提供し、放射線に対する不安を払しょくし、安心して戸外で遊んでもらえるようにすることだと思います。そして、もう一つは質の高い服や靴を提供することによって、けがなどを防ぎ、放射線以外の不安を取り除いてあげることだと思います。私がベラルーシに行っている間、何度も子供たちと交流しましたが、子供たちはとても活動的だという風に思いましたし、汚染地域であるストレリチェボの学校でも、クラブ活動でサッカーのどのスポーツを楽しんでいるという風に聞きました。私は、このような光景が福島の広野や浪江などの地域でみられるようになったらいいなと思いました。戸外でスポーツをする子供たちが増えれば、福島のスポーツがもっと盛んになるかもしれないし、現在問題視されている県民の肥満問題も、どこかの世代で解決するかもしれません。そういった面で、子供が戸外で活動することはさまざまな効果があると思います。しかし、適切な情報を子供やその保護者に広く知ってもらうには、行政の力を借りることも大切だと思います。公式な情報として安全だということをアピールしてもらえれば、安心して遊べると思う人も増えると思います。行政との提携もできたらいいと思います。スポーツの力で福島をさらに元気にしたいです。



● 金澤 舞（原町高等学校）

■ベラルーシミッションを通して学んだこと

私が、ベラルーシミッションを通して学んだことは二つあります。

一つ目は自分の目で実際に見ることの大切さです。私はチェルノブイリ原発事故の名前だけは知っていましたが、どのくらい被害が大きかったのか、またベラルーシという国についてもほとんど知らない状態でした。実際に現地の人やアベリン先生の話聞き、チェルノブイリ原発事故がもたらした影響の大きさについて知りました。チェルノブイリによって約1万人の人が障害をもっしまい、汚染地域の人々は国の政策によって避難したくなくてもしなくてはならないという状況を知った時は、本当に悲しくなりました。現在でも汚染地域が残っていると聞いた時私は、「ベラルーシは放射線が高くて危険なのかな」と初めは思っていました。しかし、ゴメリやミンスクなどの町を実際に見てみると放射線も高くなく、町や建物もとても綺麗で復興を遂げていて安全という事が分かりました。また、国民の不安を少しでも減らすために汚染地域でのセミナーやインターネットによる情報提供を行ったり、子供がプラレスカなどの保養施設で無料でサービスを受けられたりと国が様々な対策をしている事を知ることが出来ました。自分の目で実際に見たり、聞いたりすることが不安を無くすために必要だと感じました。

そして二つ目は、皆で1つの事をやり遂げる事の達成感です。

プレゼンは班で、ソーラン節は団員皆で6月の研修から取り組んできました。プレゼンは何度も何度も班の人やアドバイザーさんと修正を重ね、最終発表では最高の発表が出来ました。ソーラン節は毎日朝練をし、日に日に動きが揃い何回か発表の機会はありましたが、ショッピングモールでのアンコールでは笑顔で楽しく踊ることが出来ました。最初は大変だと思っていましたが、終わってみると皆で最後までやり遂げたことの達成感を味わうことが出来、最高のベラルーシミッションになりました。

参加生徒 感想文

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私はこのベラルーシミッションは友達に誘われて参加することを決めました。ベラルーシミッションでは日本や福島についてのプレゼン、様々な人の講義に対して質問をするなど、人前に出て発表したり発言する機会がたくさんありました。私は人前に出ることが苦手だったので、最初は不安でいっぱいでした。ですが、毎日プレゼンで人前に出て発表するうちに、緊張もなくなりだんだん楽しくなってきました。皆の前で手を挙げて質問することも勇気がいりましたが、質問もすることが出来て自分の成長を少し感じる事が出来ました。もし、ベラルーシミッションに参加していなかったらずっと内気なままだったと思うので、参加して本当に良かったと思いました。自分の苦手克服のいい機会になりました。今回の経験を通して周りの人をまとめて引っ張っていったり、今までよりもっと積極的にたくさんの方に興味を持ち、挑戦していきたいと思いました。

また、ベラルーシミッションを通して福島はベラルーシに比べ震災の記憶を伝承する力が弱いと感じました。ストレリチェボ中等学校を訪れた時、放射線クラブによるプレゼンを聞きました。放射線クラブでは、地元の人が持ってきた野菜や自分達が食べるものの放射線量を測ったり、放射線について勉強したりと様々な活動をしていてすごいと思いました。震災から何十年も経ちだんだんと震災や放射線の話を書くことが減ってきている中、自分のクラブ活動を将来に生かしていきたいと言っている生徒達の姿を見て、私ももっと自分の住む福島をもっと知る必要があると感じました。そしてベラルーシには、チェルノブイリに関する記憶が残る建物も多いので、福島ももっと震災の記憶を残し次世代に繋げていく必要があると思います。そのためにも私自身、福島についてもっと知り震災の出来事をベラルーシで経験したこと、聞いたことを活かしてたくさんの人に伝えていきたいと思いました。

● 酒井 郁澄（相馬高等学校）



■ベラルーシミッションを通して学んだこと

今回のベラルーシミッションは、私にとって人生がかわるほどの有意義な経験でした。その中で特に学んだことは、「ベラルーシ人の放射線に対する考え方」と「自分を貫き通すかっこよさ」です。

まず、ベラルーシ人と日本人の大きな違いは、放射線に対する考え方です。日本人は放射能と聞くと抵抗するでしょう。しかし、ベラルーシ人は全く抵抗しないことに実際ベラルーシへ行って気づかされました。その例としてあげられるのが、チェルノブイリ原発に一番近い所にある学校を訪問したときのことです。そこでは、農産物の放射性測定を生徒たちが自ら部活動で行っていました。また、放射能検査を特別なものとは考えず、原発に関わっている方々の話を聞いたなかで「危険だ」などと恐れたりしている人は誰ひとりいませんでした。幼稚園から放射能の教育を受けていることから、ベラルーシでは「忘却」が進んでいる中、「歴史の継承」が行われており、日本でも学ぶべき点があると思いました。これから私たち若い世代が何十年という将来にわたり、後世に伝えていくことが義務だと感じました。

二つ目は、ベラルーシ人は堂々とした性格だと研修をしている中で感じる事が多くありました。私たちはスタッフの方々からアドバイスを頂きながら、夜遅くまでプレゼンの準備をしました。相手は日本語がわからないので、ジェスチャーを意識しました。それもあって、ベラルーシ人から笑いをとることができました。最後に質問タイムがあり、4～5人の方が一気に手を挙げました。日本の私のまわりでは、こうした状況で質問をする人はほとんどいません。ベラルーシの若い青年は積極的に質問してきましたので、驚いた反面、「自分もこうなりたい・かっこいいな」と心の中で思う自分がいました。日本人の「おしとやか」な部分も長所ではありますが、ベラルーシ人の自分を貫き通し、恥じらいを感じない性格に憧れを抱きました。目標とする人間像がなかなか決まらずにいた僕にとって、今回の経験で出逢ったベラルーシ国立大学のスタッフ、ベラルーシの方々にはこれからの人生を生きる上で大切なヒントを教えてくださいました。自分に誇りを持ち、恥じらいがない人間になれるように、日頃から挑戦する心を忘れずに生きていきたいです。今回の研修に携わってくれた方々に心から感謝しております。ありがとうございました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

「スバシーバ」、ロシア語で「ありがとう」という意味です。

今回の研修中には私は、この言葉を数えきれないほど使いました。「おはよう、こんにちは」はなかなか言葉が覚えられなかったので、とにかく何かしてもらった時などは笑顔で「スバシーバ」と言うように心掛けました。「おはよう」とロシア語で言われて、「スバシーバ」と言うてしまうこともありましたが、笑顔で応えてくれました。逆にベラルーシ人が笑顔でロシア語を話してきた時、私は何かおもしろい話してくれるのかと思い、自然に笑顔が生まれました。このようなことから言葉は通じなくても、「笑顔・ジェスチャー」で心は通じ合えると実際に体験して感じました。

また、今回は幅広い年齢の人にたくさん出逢いましたが、その度に別れがありました。同じ年頃の人たちと仲良くなり、会話に笑いが生まれるようになった時に、訪れる別れは本当につらかったです。日本から7千キロ以上も離れているので、「また会える」という考えはできず、出逢いの悲しさを研修中日々感じさせられました。このように、数分前に初めて出逢った人と笑いながら話をしたり、一緒に踊ったりと「出逢い」はとても素晴らしいですが、別れが訪れます。そこで、出逢った人と一緒に過ごせる時間は、思いっきり楽しみ、その時を当たり前だと思わないように心掛けました。

チェルノブイリ事故から35年が経ったベラルーシ。今回の研修に行くことが決まり、友達に教えた際に、「内戦とか大丈夫なの?」、「生きて帰ってきてね」、「ベラルーシって国の名前?」などと言われました。正直、私も参加する前は少し不安でした。しかし、実際に行ってみて、高緯度なので、夜10時ころまでは明るく、犯罪も少ないだろうと思いました。また、とても自然豊かで、ベラルーシの方々はみんな優しくかったです。チェルノブイリ事故があったとは感じませんでした。ベラルーシは私が研修に行く前のイメージとは真逆の国でした。日本人が一番行かない国らしいですが、行ったら住みたくなる国、ナンバーワンだと私は考えます。これから何十年という将来をかけて、今回学んだことを日本人や日本人以外にも伝えていくことが、ベラルーシミッションに参加した、私たちの義務だと思います。ベラルーシは素晴らしい国だ

ということと、日本と比べて原発事故後の対処法が良い点なるべく多くの人に伝えて、少しでも日本の復興にも役立ちたいです。今回の研修で、自分の視野が広くなり、人として成長できたこと、チャンスをくれた方々全員に感謝し、一人でも多くの若い人が同じように経験できればと思います。本当にありがとうございました。

● 杉本 咲樹（磐城桜が丘高等学校）

■ベラルーシミッションを通して学んだこと

ベラルーシミッションであった、たくさんの講義や施設訪問、またプレゼン発表やソーラン節の発表を通して、学べたなと思うことは三つです。

一つ目は、仲間と一緒にひとつのものを作り上げる大変さ、重要さ、そして楽しさです。これまで、何度もプレゼンの作成、発表は行っていますが、ベラルーシでのプレゼン発表はこれまで以上に大変でした。何度も何度も修正が入り、“ここはこうじゃなくてこうの方がいい”とか“この言葉は変だから違う言葉の方がいい”、“この写真よりこっちの写真の方が目を引くのではないか”など、改善出来るところはベラルーシに行ってから多く出てきて直しても直しきれないほどでした。しかし、班の仲間と一緒に協力して作成をしていくことで、一人ではないことでもできるようになり、仲間がいることの大切さを感じました。また、仲間とやることで辛いことも嫌なこともたくさんありましたが、それ以上にプレゼン作成から発表まで楽しくできました。その点は一番学べたことなのかなと思います。

二つ目は、原発事故で起こった放射能に対しての考え方の相違点についてです。日本とベラルーシでは起こった原因、その後の対応など様々なところで違いが多くありました。例えば、ベラルーシは他国の原発事故に巻き込まれた形になっていますが、日本は自然災害がきっかけで起こっています。そのため、二カ国間で対応の仕方に違いが出てくるのは当たり前です。ベラルーシでは30年以上が経った今でも復興支援を続けているという話を何度も聞きました。国全体としても、また地域としてもそこに住む人々にたくさんの支援をし、住みやすい環境をつくり続けているということに関しては参考にできることがあると思いました。

他にもたくさんの講義を通じて、多くの人の考えに触れることで自分の考えの甘さを痛感しました。たしかに志をもってこのプロジェクトに参加しました。しかし、それだけでは足りないと思い知らされたような感じがします。このミッションを通して学んだこと、知ったこと、感じたことを今後の生活に活かさなければ行った意味がなくなるので、少しでも反映していければいいと思います。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

例えば、学校でこの活動を知ってもらうためプレゼンを行う、インターネットを通して全世界に向けて発信する、自分の生活を見直す、など、規模によって対応が変わると思います。その中で私がしたいと思うのは、自分の生活を見直すこと、この活動について知ってもらうことです。自分の生活を見直すのは、今日からできることです。テレビや新聞を見ることで原発事故が起きてから8年が経って福島がどう思われているのか知ることが第一だと私は思います。なぜなら、そこに住む人が今の現状を知らないのでは発信して行くことが不可能だからです。いま福島の線量はどのくらいで、その値が日本全国で見た時ほかとどれくらいからなのか、または変わらないのか、世界の中で見た時その値が低いのか、食べ物はどうなっているのか、など調べて分かるだけでなく、その土地に住んでいた人のリアルな声をきける位置にいるのだからきいてみるなど、小さなところから改善していきたいです。

この活動を広めることに関しては、10月に行われる日本ミッションを含め、学校で友達に話をしたり、家族とベラルーシでの活動を話したり、また、学校でそのような時間が得られるのであれば全校生徒を対象にしたプレゼンをしたりしていきたいと思います。ベラルーシという聞きなれない国ですが私たちが経験した原発事故の先輩として私たちが住んでいる地域について考える一つのきっかけを、この活動を通してもらうことによって作ることができたらいいのではないかと思います。

● 伏見 若菜（新地高等学校）

■ベラルーシミッションで印象に残ったこと

私が、日本・ベラルーシ友好訪問団2018・ベラルーシミッションで印象に残ったことは2つあります。

一つ目は、ベラルーシではチェルノブイリ原発事故だけではなく大祖国戦争での被害があったことです。ベラルーシであった被害はチェルノブイリ原発事故だけだと思っていたのですが、現地に行って戦争での被害もあったということを知ることができました。ハティニ虐殺で149人が亡くなり、約600以上の村が焼き払われ皆殺しにされたことが衝撃でした。149人のうち、生存者大人1人子供5人だけだったことがわかりました。不屈の人の記念像は、生存者の成人男性が遺体の中から息子を見つけ出したが男性の腕の中で息を引き取ったというところをモデルにしたことがとても悲しく残酷なことだと感じました。村人が集められた納屋の後には、屋根の形をしたモニュメントが設置されました。プレートには、住民の名前が書いてありました。また、強制収容所と集団処刑の場所をモチーフとした記憶の壁や、犠牲者を示す永遠の火というモニュメントなどが印象に残りました。

二つ目は、プレゼンテーションとソーラン節です。プレゼンテーションでは、アドバイザーの方からアドバイスを頂きまとめることや付け足すことがたくさんあり発表が成功するか不安でした。最後のプレゼンテーションでは、緊張したけれど班のみんなで最高のものにできたのでよかったです。ソーラン節では、覚えることが難しく友人と教え合いながら覚えていきました。最初の発表は、曖昧な踊りでしたが最後は、みんな楽しくソーラン節を踊れたのでいい思い出になりました。

ベラルーシミッションでは、大変なことが多い分楽しいことがたくさんありとてもいい経験になりました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

自分の目を見たこと感じたこと聞いたことを福島に発信していきたいです。インターネット等のメディアでは、デマが多く真実を書いてあるわけではないのでまずは身近な人から伝えていきたいです。例えば、食べ物のことや今の福島の現状を少しでも知ってもらえるようメディアではなく自分の口から言っていこうと考えています。震災からあまり時間は経っていないのですがには信じてもらえないかもしれないけれど少しずつ今の状況からさらに良くなるよう私たちが一生懸命伝えていかなければいけないことを学びました。しかし、メディアがデマだけを流しているわけではないのでマスコミの力を借りて福島の現状を発信していくことも必要なのではないかと考えています。そして、風評被害で売れなくなってしまったお米や野菜などを震災前のようにたくさんの人に買ってもらえるよう私たちがこのお米や野菜は検査に出しているから安全なのだということを日本やたくさんの国に知ってもらえるようメディアに記載することなど知らせることも大切などではないかと思いました。

ベラルーシでは、30年経った今でも30%~40%の人がまだ原発の影響を恐れている人がいるということがわかりました。日本では、まだたくさんの人が原発の影響を恐れていますが三十年経っても恐れる人がいるのではないかと考えました。今からできることは、毎年健康診断を受けさせることなどがあると思います。そして、原発の影響だけで病気になるのではなくストレスなどの原因もあるということを知らせる必要があると思いました。

これから、私たちがベラルーシで経験したことを活かしてボランティアなどに参加していきたいです。

【B班】

● 山田 玲華（磐城高等学校）

■最も印象深かったこと

私はこの研修に参加するまではベラルーシという国も場所も知りませんでした。今回の友好訪問団に参加することでベラルーシという国や場所を知りました。ベラルーシに行き、沢山の方よりお話を伺いましたが、その中からチェルノブイリ対策局の方から聞いた話が印象深かったです。

1986年のチェルノブイリ原発事故では国土の23パーセント（ヨーロッパでは一番ひどい被害）が汚染されました。200万人以上が被害を受け、国の政策として避難した人が14万人、自主避難の人が20万人いました。汚染のひどい479の町や村は地図帳から消されたそうです。存在していたものがある日突然、ないことにされてしまったことが私はさみしいと思いました。ベラルーシにある半分以上の地区が汚染されましたが、今は21の地区に減少してどこが汚染の高い場所なのか地図が作られているそうです。

1990年から2020年まで5年ごとの国家プログラムが行われていて、今は5番目にあたります。被災者の社会保障、医療、保養、農業における放射線から身を守る措置、社会経済的発展の整備、学術的な研究、セミナーなどが行われています。

放射線の被害を最小限にするために医療サービスも十分に行うようにしています。原発の作業員は7万数千人、そのなかで障害をもってしまった（放射線の影響やストレスによる）人は病気の種類によって障害手帳がもらえます。またリストにある150万人（25万人は未成年者）は毎年必ず健康診断を受診しています。18万6千人は無料で保養施設に行く権利が与えられるそうです。私はその中の一つである「小児リハビリ保養センターブラレスカ」に行きました。ブラレスカのようなリハビリ施設は11か所、保養施設は30か所以上あり、年間8万人以上が利用しています。「ブラレスカ」には小児科や耳鼻科、眼科、歯科医が常駐しており、一人ひとりにあった治療をしています。スポーツセラピーや塩セラピー、様々な種類のお風呂などがありました。こちらは国の施設ですが日本にもあったらいいなと思いました。

これとは別にロシアとベラルーシの共同5か年計画のうち5番目が進行中です。また1990年から日本や中国、フランス、スイスなどの国から援助を受け、これまでの政策を維持し、経済発展を汚染地域にもたらすように努めています。

最終的に分かったことは32年以上たっても住民の30~40%以上はいまだに放射能を怖いと思っている人がいること、住んでいる人や地域にあった情報提供が大事だということです。これからインターネットや電子メールでの情報提供や、質問すると専門家が答えてくれるシステム作りや国・行政の取り組みを電子メールで発信していくそうです。現在は国内外でマスコミ関係者向けのセミナーや復興をテーマにした絵のコンクールが開催されています。これからも課題解決に努めていきます、ということでした。私は32年経った今でも復興に向けた努力を続けていることがすごいと思いました。福島は原発事故から7年しか経っていないのでベラルーシを見習って地道に努力していくことが大切だと思いました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

現地の人たちと交流してベラルーシ人の明るさや優しさを肌で感じました。子供保養施設ブラレスカを訪問したときは英語が話せる子供たちもいて、英語でコミュニケーションをとることができました。また、ロシア語しか話せない子供も、ディスコのときは一生懸命ジェスチャーで振り付けを教えてくれたり、すれ違うときに手を振ってくれたりしたこともありました。ストレリチェボ中等学校でお互いの国について質問をし合ったときは、日本のことをたくさん質問してくれて、空き時間には一緒に写真を撮ろうとカメラを向けてくれたこともありました。言葉は通じなくても積極的に自分から伝えようとするのが大切なのだと思います。

私のようにベラルーシについて知らない人が日本には沢山います。ベラルーシの国は治安が良く、そこに住む人たちは温厚で自分に自信を持っていて堂々としており積極的でした。ベラルーシの良さを沢山の人の知ってもらえるように発信したいです。

● 若松 桜花（平工業高等学校）

■最も印象深かったこと・興味を持ったこと

私は、今回の研修において様々なところで見聞きした中で一番印象深かったのはストレリチェボ中等学校の学生たちとの交流と戦争博物館です。ストレリチェボ中等学校では、放射線クラブに参加している学生からプレゼンを通して活動内容を聞いたり、交流事業で学生たちと話したりしました。

放射線クラブの活動の話聞き、日本でも子供が放射線について知る機会を増やしたり、原発被害にあった地域に食物や土壌に使う線量計を設置し定期的に公開検査を実施したりして、子供から大人へまたは地域から住民へ情報提供していかねばならないと思いました。実際に、現地学生が目前で計測してくれたり、学校のほうで準備してくれた学校の菜園で採れた果物を食べたりしてきましたがそれはとても美味しかったです。

また、現地学生との交流でベラルーシと日本の学校の制度の違いを知りました。休みの期間や時期は国ごとによって違うことは知っていましたが、ベラルーシと日本の休みの量を比べると圧倒的に日本は休みが少ないと感じました。

戦争博物館では、ソ連時代に合ったベラルーシで起こった凄惨な出来事を見学してきました。凄惨な出来事の裏にベラルーシ人が戦争中、ドイツとどのような戦いを続けてきたのか知ることができよかったですと思いました。

最後に、私は日本のメディアを通してですが原発事故の存在は知っていましたが、メディアを通して見たものと自分の目で見たものは明らかに感じるものが違いました。また、原発事故の被害を受けたことしか知らなかったので戦争博物館に行って凄惨な事実を知ることができてよかったです。ベラルーシについてまだ知らないことばかりなのでまた、ベラルーシに訪れてみたいです。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回私は、様々なイベントを通して言語が通じなくても精一杯取り組めば、相手に伝わることがわかりました。言語がわからないだけで折り紙の折り方一つ教えるのも大変でしたが、その先にやりがいを感じることができました。そのやりがいを糧に今後どのような生活をしていくかちゃんと考えようと思います。

また、他の班のプレゼン発表を聞き、来年ある課題研究の発表に向けての学習もできたと思うので、今回のプレゼン発表を生かして課題研究のパワーポイントを作ったり、原稿を考えたりしていきたいと思いました。プレゼンは数をやっただけうまくなることも今回の研修で分かったので社会に出てからもこの経験は活かせると思ったので大切に生きてみたいです。

● 小野内 舜（相馬高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回、私がこのベラルーシミッションで学んだことは3つあります。

1つ目は、単純に日本とベラルーシの文化や考え方の違いです。私は、今回のミッションでチェルノブイリ対策局局員さんの講義を聞いた時に、チェルノブイリ原発事故で線量が高く住むことが難しいと判断された村などは多く廃村されたこと知り、これは日本の原発事故後の対処と全く異なるものだったので、私はとても驚きました。他にもこういった違いが多く見つかりました。

2つ目は、人と接し意見を共有する大切さです。私たちのグループは、ベラルーシに行って1日目、2日目くらいまではあまり意見が出ず、話し合いも進むに進めないという状況が続きました。しかし、毎晩のグループワークのおかげで少しずつみんなも打ち解けてきて、次第に様々な意見が出てくるようになりました。そうして話し合いや試行錯誤を重ねていき、ついにプレゼンを完成させることが出来ました。そして、プレゼン前日の夜には1人の部屋に全員が集まり、決起集会を開くほどの仲になりました。このように、初めは緊張していても、思い切って自分から前に出てみるのが大切だということに気づきました。

そして3つ目は、自分の未熟さ、ふがいなさです。これがベラルーシに行って1番感じた、学んだことだと思います。ベラルーシに出発する前は、自分はもう少しできる、役に立てると思っていました。しかし、実際に行ってみると全くついていけず、みんなの背中を追うのが精一杯でした。プレゼンの練習で開沼先生に色々厳しい意見をされて、みんなが落ち込んでいる時も私は挽回のアイデアが思いつかず、ただ落胆するばかりでした。しかし、私はこの経験をして、まだまだ努力が足りないなと気づくことが出来ました。そしてこの経験は、自分自身が成長するのに必要なことだと感じました。これからは、この研修で学んだことを活かして、何か社会に役立つようなことができたいなと考えています。

■今回の経験を今後どのように活かしていきたいか

私は、このベラルーシミッションで初めて海外というものを経験しました。正直、私はこの研修に参加するまでベラルーシという国を、名前を知っている程度の認識しかありませんでした。しかし、研修を行って概要を知り、私は好奇心いっぱいに出発しました。そして、ベラルーシは予想通りに日本と文化や生活形態が異なっていて、予想以上に私を惹きたてるものがたくさんありました。ここでは紹介しきれないので割愛しますが、これらのものを日本の文化や生活に上手く取り入れることが出来れば、日本はより良いものになっていくのではないかと感じました。

そこで私は、どうすればこういったことができるだろうかと考えた結果、日本とベラルーシをつなぐパイプのような存在になれば良いのではないかと思います。具体的に言うと、ベラルーシで直接教わったことを、日本の多くの人に何らかの方法で伝え広めていく、逆に日本のことをベラルーシの人に伝える。そういったことがしたいと思うようになりました。それは、原発関係のこと、育児のこと、経済状況のこと、

他にもたくさんあると思います。ですが、私はやはり福島に住んでいる身として、原発事故、原子力について伝えていかねばならないと思いました。そして、この活動をするのが今から自分出来る最も大きい社会貢献だと思いました。今回のこの研修で私達は色々な場所を訪れ、色々な人と交流したり、話を聞いたりしました。ですが、これはまだほんの一部でまだまだたくさん学べる、感じれるものがベラルーシにはあると思います。そして、そういった可能性を広げてくれたのは、今回の研修、そして西本さんのおかげです。私は今回の経験をただ単に知識としてではなく、人生の大切な体験として、今後の生活に活かしていきたいです。

● 芳賀 力（磐城桜が丘高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回この研修に参加して、僕が学んだことは2つあります。1つ目は「福島のことを全く知らない人たちに福島について伝える」ということの難しさについてです。僕はこれまでも福島のことを伝えるプレゼンテーションをしたことがありますが、そのプレゼンのどれも、ある程度福島について知っている人たちへのプレゼンでした。しかし今回のプレゼンの相手は、全く、あるいは少ししか福島について知らないベラルーシの人たちでした。ここでまず苦労したのは「いつも以上に客観性を持つ」ということです。プレゼンをする上で客観性を持つことは当たり前のことですが、今回のプレゼンはこれまでとはわけが違います。前述したとおり、プレゼンの相手はベラルーシの人たちです。そこに、言葉の壁もあります。僕たちB班は発表のテーマ「地方の課題・福島の課題」というものだったこともあり、プレゼンを作るのにとても難儀しました、実際僕たちの班は、ニツ沼の研修の時と、渡航前最終説明会の時と、ベラルーシで最初にしたプレゼン、全てが別々のものです。その後、3つ目のプレゼンから派生させたプレゼン（買い物難民についてのもの）を制作し、それを発表しました。そのプレゼンは、パワーポイントにも図や数値を多く入れ、ベラルーシの人たちにわかりやすいものにしました。その他の表現も、古澤先生のおかげで何とかなりました。結果、プレゼンの冒頭のクイズにはベラルーシの女性が一発で正解するなど、発表している私たちも楽しく発表が出来ました。

そして2つ目に学んだことは、「ベラルーシの人たちと僕たちの価値観の違い」についてです。僕はゴメリ大学のアヴェリン教授に「ベラルーシでは、チェルノブイリ原発事故について被害者の方から直接語り継ぐ事はしていますか」という質問をしました。僕は実際に長崎県で原爆被爆者の方のお話を聞いたことがあったので、ベラルーシでも同じような事をしているものだと思っていました。しかし教授の答えは、驚くべきものでした。「個人関ではあるかもしれないが、公に話すことはない。記憶は風化していくし、時代によって受け止められ方が変わってくるから」この答えに、僕をとっても驚きました。ですが実際ベラルーシでは、地域によってかなり放射線に対する意識の差がありました。他の地区よりも線量が高いホイニキ地区の、ストレイチェボ中学校では「エーデルワイス」というクラブに所属している生徒達が自ら、私たちの前で食べ物の線量を測ってくれました。地域によって差異はありますが、全体としてベラルーシの人は「過去」ではなく「今」に目を向けているということがわかりました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回の研修を通して僕は、将来のヒントが得られた気がしました。

今回僕たちがベラルーシでした経験は、何物にも代え難い経験だと思います。高校2年生という時期に、20世紀最大の悲劇と呼ばれたチェルノブイリ原発事故について学ぶために実際ベラルーシまで行った学生は、全国でもそういるものではありません。ベラルーシがどこにあるのか、ベラルーシという国がどのような国か知らない人は多くいると思います。僕自身、研修前まではそうでした。しかし実際にベラルーシに行くことによって、この国の良さや魅力を感じました。そして何より、ベラルーシの人たちはみんないい人です。男性はみんなかっこいいし、女性はとても美しいです。（重要）ベラルーシのことを、もっと多くの人たちに発信していきたいと思いました。

僕はB班のPC担当でした。ニツ沼の研修から班のみんなが沢山意見を出してくれて、どのようにパワーポイントを作るのかとても楽しかったです。成田空港で実際にコンピュータを渡されてからも、班のみんなで試行錯誤して、時には他の班の人に手伝ってもらいながらも、最高の発表にすることが出来ました。僕は高校で生徒会をやっているので、今回のこの経験を活かして、もっと円滑に学校行事を進め、より良い学校生活を創り上げたいと思いました。

今回のベラルーシミッションは僕に将来の希望や目標を与えてくれました。自分の進路も見えてきました。これからもベラルーシと関わりをもって、日本とベラルーシの架橋になりたいです！Спасибо！Беларусь！

● 矢口 晴夏（ふたば未来学園高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私は小学3年生の時に東日本大震災にあって、それから避難生活送っています。そして、今私が通っているふたば未来学園ではほかの高校より震災について多く学ぶ時があります。未来にこの経験を繋ぐためにはもっと福島について知り、周りに正しいことを伝えることが必要だと考えました。そして、そのようなことが出来るのは震災を経験している私たちなのだと思います。今回、ベラルーシミッションの話を聞いた時にチェルノブイリ原発事故を経験しているベラルーシに行つて原発事故からどのような復興を遂げてきたのかを聞いてきて見本にしたいと考えました。そのために、このミッションに応募しました。

実際にベラルーシに行ってみて、思った点が2点あったのでそれについて書きます。

まず1点目は、日本は原発事故の見本としてチェルノブイリ原発事故があったけどベラルーシは世界で初めての原発事故だったので見本がなく解決策などを自分たちで考えなくてはならなかったという点です。ベラルーシでは対応の仕方がわからず多くの人が迷い悩むことが多くありました。その時は原発の周りの人に全然放射線や放射能についての知識が全くなくなりが起きてるのかもわからない状況でした。でも、

日本ではベラルーシという見本があったからこそ、原発の周りの人に放射線や放射能の知識が少しありベラルーシの時のような混乱はありませんでした。

2点目は、ベラルーシも日本も風評被害や被災した地域の人達に対する差別など同じようなことが起こっていたのが残念だったということです。1回ベラルーシであったことが日本でも繰り返されているという現実があっはいけないことだと思います。ベラルーシを見本にしてどうにか防げなかったのかと思います。この改善点はこれからの未来に役立てたいのでこれからみんなと一緒に考えていきたいです。

この2点がベラルーシに行ってきた強く感じたことです。これから、この学びが役立てられるように頑張ります。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

東日本大震災と東京電力福島第1原発の事故で人口減少、少子高齢化、過疎化などの課題を持っている地域で社会に貢献のできる能力を身につけ社会が抱える課題に挑戦できる生徒の育成を目指しています。「原子力災害からの復興を果たすグローバルリーダーの育成」をテーマとした教育テーマもあり文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール(SGH)」の指定も受けています。その中でも特に、未来創造探求という「原子力災害からの復興」をテーマの中心とした課題研究があります。

まずは、ベラルーシで学んだことを今紹介をした未来創造探求に役立てたいです。この課題研究は、ただどこが悪いのか調べるだけではなくその悪い点をどのように改善していけばいいのか、どのようにしたら未来に繋がられるのか考え実践します。ここの実践するというのがほかの高校ではできないことだと思います。私たちは地域の方々の手を借り少しずつ復興に貢献していけているはずで。昨年までの先輩方の活動を見ている、祭りを復活させたり、銘菓を復活させたりと元の町に戻そうと頑張っていて少しずつ前進しているのではないかなとおもいます。次は自分が動く番なので、原発事故の見本となるベラルーシで学んできたことを活かして少しでも復興が進めばいいなと考えています。

もう一つは、県内外で原発について話を広げる機会を作り世界中の人に今どの状況でどのような手が必要なのかを伝えていきベラルーシのように復興していきたいです。チェルノブイリ原発事故は福島の見本となりました。1回起きた過ちをもう一度行なうてことがないように、ベラルーシで学んできたことを、勘違いのしている人達に伝えていけたらいいと思います。

私は、ベラルーシで学んできたことを今述べたような形で今後に活かしていきたいと思っています。周りの人が出来なかった特別な経験を自分から発信していきたいです。

【C班】

● 小松 晃己（磐城高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回の研修で学んだことは、歴史というものは実際に体験した人々から伝えられることで初めて生まれるということだ。チェルノブイリ原発事故というものは前から知っていたがどのような事故でどのような被害をベラルーシという国が受けているのかを詳しくは知らなかった。しかし実際にゴメリという町に行き、学生のころ被害を受けたという副市長の話や、歴史館を見ることで、その事故の悲惨さ、残酷さをリアルな状況を知ることができた。またベラルーシは福島と比べて被災した市民のアフターケアがしっかりしていると感じた。例えば景観では汚染物質は人々の目に入るところに置かないなど放射線に対する恐怖心を取り除こうとしていたり、被災者には住む場所を提供したり、お金を保証したりしていたりした。やはり新しい意味での復興は人々がその事故を心にとどめながらも放射線を気にしないで生きることができてこそだと思う。また日本とベラルーシで大きく違うことは国が動いているかいないかであると思う。ベラルーシは国が中心となって除染活動や復興に力を行っている。しかし、日本は力を入れるどころか2020年には放射線の対策委員会をなくしてしまうらしい。こんなことでは福島の放射線からの復興はまだまだ遠いと思った。またベラルーシは元の生活にもどることだけでなくさらにそこから産業を発展させる努力をしている。今まで頑張っていた農業だけでなく私たちが行ったwargaming社などがよい例でIT企業のような企業が発展してきている。福島もベラルーシのように何か新しい産業が求められているのだと思う。復興の次の発展も視野に入れてこれからは動かなければいけないことを学んだ。私には未来がある。希望がある。日本を福島を担わなければならない。その単純なことを今回の研修で学んだ。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回私はC班の班長を任された。今回の研修からこれからいかしていきたいのはリーダーとはどのように振舞えばいいのかということだ。うちの班は癖が強い人が多く、一人で何でもやろうとする人、遊び感覚で来て作業に参加しようとしなひと、何も発言しようとしなひ人などなどいろいろな個性が集まっていた。そんな中、班をまとめるのは一苦労であった。そんな中、人をまとめるには大事なことがいくつかあると思った。ひとつはみんなが作業しやすい環境を作ることである。これはwargaming社の社長の受け売りであるが、先ほど述べた癖が強い人たちはやる作業が明確にわかっていなかったために勝手な行動をしてしまったのだと思う。なので今何をしてほしいのかをわからせることが大事なのだった。また次はコミュニケーションである。人はさまざまな性格の人がいる。だからどのような対応をしたら一番力を発揮してくれるかを把握することが上に立つ人間には必要不可欠なのだった。またまあこれは個人的に思うことだがユーモアというものがあると人もついてくるのだと思った。ゴメリ大学のアペリン先生のように。もう少しベラルーシ研修中にもユーモアをだして班の雰囲気や和ませればよかったと反省している。私は今バレー部で副キャプテンをしている。時にはメンバーとすれ違ったり、意見が合わなかったりもする。そんな時、私は自分は正しいと思うことが以前までは多かった。しかしこのベラルーシ研修を通して自分を客観的に見るようになった。この客観的に見るということは案外簡単そうに思ってた案外難しいものである。このようなことに気がつくことができたのはこ

の研修に参加したからこそだと思う。出資してくださった会社、スタッフの皆様、そしてベラルーシの皆さんに感謝を申し上げたい。またこのように小さなこと、大きなことにも感謝して生きるということをこれからの人生に生かしていきたい。

● 荒 彩乃（新地高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私は、ベラルーシでたくさんの事を学び、今の福島・日本の現状についてベラルーシの方々に伝えることができました。

今回の研修で、学んだことは3つあります。

1つ目は、相手のことを考え行動し、たくさんの経験を得ることです。私にとって1番大変だったのは、プレゼンテーションの準備でした。最初は、渡された台本をただ読めば大丈夫だと思っていました。しかし、現実とは違いました。次々と内容が変わり、メンバーやスタッフからたくさん指摘を受けました。また、メンバーとの考え方が違く、何度も苦戦をしました。その結果、プレゼンは大成功となり、改めて相手の考えに尊重し行動することが大切だと気づきました。

2つ目は、気持ちの伝え方です。ただ台本を読んで発表するだけでは、相手には伝わりません。手や身振りを使うことで、言葉に壁があっても、動作を加えることで想いはきっと伝わるはずで。このことを頭に入れてプレゼンを行うことで、私たちの想いは伝わったと思います。

3つ目は、仲間の大切さです。時々班と居ることが嫌になった時も、周りの仲間が支えてくれたおかげで、毎日がとっても充実した日々を過ごすことができました。仲間があいだに入っていなかったら、発表は成功していなかったはずで。仲間のおかげで少しでも大人になって帰国することができました。

これからは、この仲間と一緒に研修で学んだことを活かし、福島に貢献できたらなと考えています。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私は、ベラルーシでたくさんの方々から学ぶことができました。この経験は、将来きっと役に立つと思います。

まずは、私達日本の先輩であるベラルーシを知ってもらいたいです。私も、報告会に参加するまでは、どういう国か、どこにあるか全く知りませんでした。しかし、実際にベラルーシを訪れて、この国の良さや魅力を感じることができました。この魅力や良さをまだ知らない方にも是非知ってもらい訪れてほしいです。

また、原発事故を経験した私達でも、放射線に対する知識がなかったり、知っていても間違えて覚えている人が何人もいると、私は思います。このような事を無くすためにも、今回の研修で得た知識を最大限に活かし、正しい知識を知ってもらい、復興の手助けとなれるよう、少しずつでも周りの人たちに広めていきたいと考えています。

自分の意志や夢をしっかり持てたという事も、このベラルーシミッションがあったおかげです。このような事業に参加できて、本当に良かったです。とても有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございます。

● 高瀬 優花（磐城高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私はこのベラルーシ友好訪問団・ベラルーシミッション大きく2つのことを学ぶことが出来ました。

1つ目はベラルーシがチェルノブイリ原発事故で被った被害とその対策、そして現在の状況です。32年前に起きたチェルノブイリ原発事故で、ベラルーシは大きな被害を受けました。原発自体はウクライナにあるのにも関わらず、放射性物質の70%はベラルーシに降り注いだそうです。私はホイニキ地区の博物館で、汚染された村は人が住めなくなってしまうため地図上から消えてしまったこと、現在も立ち入りが禁止されている地域では立ち入りが厳しく制限されていることなどを知りました。

しかし、汚染された地域でも除染されるなどして住めるようになった地域では、定期的な健康診断による健康面への配慮や、地域で作られる食べ物の検査ができるため安心して食べることが出来るためように対策がされていて、普通に生活することができていました。実際に立ち入り禁止区域のゲート前まで行きましたが、その地域では酪農や農業が盛んに行われており、「安全だということが確認されているから全く怖くない」というのがベラルーシの人達の考え方でした。この考え方の背景には、汚染地域に住む子供たちに学校で放射線教育を行い、正しい知識や情報を教えていることがあげられると感じました。

2つ目はベラルーシでの戦争、歴史についてです。私はこのミッションに参加する前はベラルーシの戦争といっても、何が起こったのかほとんど知りませんでした。実際に戦争博物館や戦争によって消えてしまった「村のお墓」のあるハティニに行って話を聞くとベラルーシが第二次世界大戦で大きな被害を受けたこと、たくさんの罪のない人達が虐殺されたことなどとても悲しい歴史があることを知り、ショックを受けました。学校の授業で習うだけでは知りえなかったであろう話をたくさん聞くことができました。

ベラルーシミッションでは、私が今まで知らなかったこと、なかなか聞くことの出来なかった話を聞くことができ、たくさんのことを学ぶことが出来ました。自分なりに調べて知っていたつもりでも、実際はよく知らなかったことが多くありました。正しいことを知るために常に学び続ける姿勢が大切だと思いました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私がこのベラルーシ友好訪問団に参加した理由は、チェルノブイリ原発事故に興味があったというのもありますが、ただ単純に「海外に行きたかったから」でした。応募した時は軽い気持ちで楽しみに思っていたのですが、実際はそんなに甘いものではありませんでした。

ます出発前の事前合宿。ベラルーシで班ごとに発表するプレゼンを作成しました。私たちの班は「日本の産業」についてプレゼンでしたが、なかなかまとまらず、完成形が見えないまま合宿が終わってしまいました。不安を抱えたままベラルーシミッションが始まり、空港で飛行機の乗り換え待ちの時に班のメンバーと話し合っ急いでプレゼンをつくりました。ベラルーシに到着した日の夜にリハーサルがあるからです。が、リハーサルでのプレゼンも上手くいかず、作り直しに。プレゼンの内容を作っては壊して、作り直して、壊して、作り直して…修正作業は夜中の2時過ぎまで続くこともありました。この作業をしている時も、班のメンバーの仲もギクシャクしたり、個性が強すぎて(?)まとまらず思うように進みませんでした。それでも皆と力を合わせてなんとかプレゼンを完成させて練習をして、成功させることができました。達成感と同時にこの班で頑張ってきて本当によかったと心から思いました。

私はこの経験から、チームで協力していくこと、諦めずに挑戦することの大切さを学びました。そして自分の意見を言うだけでなく、周りの意見も聞いて協調していくことが大切だと思いました。このことはこれからの学校生活だけでなく、社会に出てからも生かせると思います。

また、ベラルーシミッションで、チェルノブイリ原発事故から32年後経ったベラルーシを実際に見て、福島30年後はどうなっていくのか、どうなるべきなのかを考えるきっかけになりました。私は将来、地元福島を支えることのできるようなリーダーになりたいです。

● 佐藤 勇志 (相馬東高等学校)

■私が見た女性が活躍する社会

ベラルーシは、役員や路面電車の運転手の多くが女性であるように女性の社会進出が著しいのが現状です。それに比べて日本は、現代となつては男女雇用機会均等法や男女共同参画社会基本法などの法律が制定されたことにより、昔よりは女性が働き易い環境になりつつありますが、まだ男女平等には程遠いのが、現状であると言えるでしょう。

そこで私は、何故日本とベラルーシでは何故、このような差が生まれているのかについて調べて参りました。その結果、ベラルーシには、女性が育児休暇を取得した場合にその女性を解雇することを禁じる法律があることや、男性側も育児や家事に対して熱心であること、拡大家族が多いことなどが挙げられました。そのようなこともあり、現地の人によると、ベラルーシは大半が共働きであることが分かりました。これは、日本が本来あるべき姿だと思えます。

逆に、日本では、拡大家族の減少と核家族の増加や、女性が育児休暇を取り辛い点、文化や風習の違いなどが挙げられると思います。特に、女性が育児休暇を取り辛いという点では、職場や家庭からのケアが不足していると言えると思います。もし、日本がこのまま、女性の活躍し辛い社会が続くと、少子高齢化による労働力不足に加え、更に労働力不足に陥ると考えています。

このような点から、私は週末などに、家族参加の子育てセミナーを開催し、子育て中の親などを参加させ教育する必要があると考えました。その他にも、祖父母等に世話をして貰うことにより、母親の負担が軽減するのは勿論のこと、孫と遊ぶことにより、祖父母の心身の健康も保てるなど様々な利点があると思います。

最後に私は、今回の訪問団を通して、原発事故後の対応や現地の現状について学ぶの他にも、少子高齢化が進む現代の日本にとって必要な点についても学ぶことが出来ました。

これを機に学んだことを発信していきたいと思えます。

● 柴田 陽菜 (磐城桜が丘高等学校)

■ベラルーシミッションで学んだこと

私は小さい頃から何もするにしてもいつも受け身でした。自分の目の前にあることだけをひたすらこなしてきましたが、そのせいで苦労したことは今まで一度もありませんでした。だからこれからもこのまま今まで通り生きていけばいい、そう思っていました。無理に人と関わる必要性が感じられなかったからです。しかし今回はたくさんの人に絶対自分のためになるからと勧められ、自分でも何かプラスになることが見つけられればと思い、ベラルーシに行くことを決めました。高校も住んでいる場所も違う人達と外国に行き、12日間も一緒に過ごすというのは不安でしかありませんでした。最初はお互い顔色を伺ってばかりで、プレゼンをやるにしる、よさこいをやるにしる、全然まとまりがありませんでした。「やっぱり自分の思っていた通り、無理に人と関わりを持つとしなくても良かったじゃん、こんなことをしたところでなにを学べるというのだろうか」と正直思いました。しかしベラルーシに行き、福島のために私達にできることは何か、全員が同じ目的に向かっていろいろな活動をしていくうちに、自分から心を開きだんだんと言いたいことも言えるようになっていきました。そうすると自然に相手も心を開いてくれたように感じました。その時やっと人と関わるのがどれだけ大切で、心が通じあった時にどれだけ喜びを感じることができたかを初めて知りました。同じ目的に向かって仲間と共に頑張ると、どんなに辛いことがあっても必ず乗り越えられるのではないかと思います。仲間というもののがどれだけ大切なものかを改めて感じました。そう考えると、自分は今まで何度このようなチャンスを逃してしまっただろうかと、少し後悔はありますが、高校二年生で仲間の大切さに気づけたということプラスを考え、これからは絶対にチャンスを逃すことのないようにしようと思いました。ベラルーシミッションに参加して出会った素晴らしい仲間感謝したいです。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私は小学校三年生のときに東日本大震災にあい、それによる原発事故で大変な目に遭いました。今となっては震災前となんら変わらない生活ができていますが、一時は家族で避難して学校に行けなかったり、外遊びができなかったり、普段当たり前だと思っていたことが当たり前じゃなくなってしまうました。その後私の周りは普通の生活に戻りましたが、震災から七年がたった今でも原発事故のことを気にして、勘違いしている人が日本にはたくさんいます。悪い情報ばかりが人々の記憶に残りつつあり、そんな世の中で原発事故のことを知らない小さな子

どもが増えてきています。私は、本当のことを知らずに生きていく人が増えていくのは怖いことだと思います。そんな福島で生きる私達にできることは何かと考えたとき、思い浮かぶのは「今の福島を伝え続けていく」ということです。そんなときにベラルーシミッションの話聞き、過去に原発事故による影響を受けたことのある地域がどのように事故のことを伝え続けてきたのか、とても興味があり応募しました。

ベラルーシミッションでは、実際にベラルーシで復興のためにどのようなことを行っているのかを学ぶ機会が多くありました。その中でも私が一番印象に残ったのが、幼稚園くらいの年代の時からお遊戯会でやる劇などを通しチェルノブイリ原発事故で受けた影響や、原発事故がまた起こったらどうすればよいかについて学んでいる、ということです。そうすることで、実際に原発事故を経験していない人でも事故について知っているということが当たり前になっていき、本当のことを知るのに役立つと思いました。私は今、将来幼稚園や保育園で働くことに興味があり、それであれば自分も関わって実践できるのではないかと思います。そのためには、正しい情報を習得し続けることが必要であると考えます。私にとってのスタートは今であり、今回のベラルーシミッションで学んだことを活かしつつ、アンテナを高くし正しい情報を集め続け、それらを子どもたちに伝えることが私にできることだと考えます。

● 小松 晃己 (磐城高等学校)

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回の研修で学んだことは、歴史というものは実際に体験した人々から伝えられることで初めて生まれるということだ。チェルノブイリ原発事故というものは前から知っていたがどのような事故でどのような被害をベラルーシという国が受けているのかを詳しくは知らなかった。しかし実際にゴメリという町に行き、学生のころ被害を受けたという副市長の話を書くことや、歴史館を見ることで、その事故の悲惨さ、残酷さなどをリアルな状況を知ることができた。またベラルーシは福島と比べて被災した市民のアフターケアがしっかりしていると感じた。例えば景観では汚染物質は人々の目に入るところに置かないなど放射線に対する恐怖心を取り除こうとしていたり、被災者には住む場所を提供したり、お金を保証したりしていたりした。やはり新の意味での復興は人々がその事故を心にとどめながらも放射線を気にしないで生きることができてこそだと思う。また日本とベラルーシで大きく違うことは国が動いているかいないかであると思う。ベラルーシは国が中心となって除染活動や復興に力を行っている。しかし、日本は力を入れるどころか2020年には放射線の対策委員会をなくしてしまうらしい。こんなことでは福島の放射線からの復興はまだまだ遠いと思った。またベラルーシは元の生活にもどることだけでなくさらにそこから産業を発展させる努力をしている。今まで頑張っていた農業だけでなく私たちが行ったwargaming社などがよい例でIT企業のような企業が発展してきている。福島もベラルーシのように何か新しい産業が求められているのだと思う。復興の次の発展も視野に入れてこれからは動かなければいけないことを学んだ。私には未来がある。希望がある。日本を福島を担わなければならない。その単純なことを今回の研修で学んだ。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回私はC班の班長を任された。今回の研修からこれからいかしていきたいのはリーダーとはどのように振舞えばいいのかということだ。うちの班は癖が強い人が多く、一人でもやろうとする人、遊び感覚で来て作業に参加しようとしないうと、何も発言しようとしないう人などなどいろいろな個性が集まっていた。そんな中班をまとめるのは一苦労であった。そんな中人をまとめるには大事なことがいくつかあると思った。ひとつはみんなが作業しやすい環境を作ることである。これはwargaming社の社長の受け売りであるが、先ほど述べた癖が強い人たちはやる作業が明確にわかっていなかったために勝手な行動をしてしまったのだと思う。なので今何をしてほしいのかをわからせることが大事なのだと思う。また次はコミュニケーションである。人はさまざまな性格の人がいる。だからどのような対応をしたら一番能力を発揮してくれるかを把握することが上に立つ人間には必要不可欠なのだと思う。またまあこれは個人的に思うことだがユーモアというものがあると人もついてくるのだと思った。ゴメリ大学のアベリン先生のように。もう少しベラルーシ研修中にもユーモアをだして班の雰囲気と和ませればよかったと反省している。私は今バレー部で副キャプテンをしている。時にはメンバーとすれ違ったり、意見が合わなかったりもする。そんな時、私は自分は正しいと思うことが以前までは多かった。しかしこのベラルーシ研修を通して自分を客観的に見るができるようになった。この客観的に見るということは案外簡単そうに思ってたが案外難しいものである。このようなことに気がつくことができたのはこの研修に参加したからこそだと思う。出資してくださった会社、スタッフの皆様、そしてベラルーシの皆さんに感謝を申し上げたい。またこのように小さなこと、大きなことにも感謝して生きるということをこれからの人生に生かしていきたい。

【D班】

● 山藤 広翔 (磐城高等学校)

■ベラルーシミッションで学んだこと

僕はベラルーシミッションでベラルーシの文化に触れ多くの事を学びました。またそれとともに自分自身の成長も感じました。僕はベラルーシに行く事が決まる前、ベラルーシがどこにあって、何語が使われていて、どんな歴史があるかなど全く知りませんでした。全く未知の国に行く事や、英語圏ではない国に行く事に心配はありましたが、実際現地に行ってみると、とても綺麗で自然が豊かで人々も優しく素晴らしい国でした。

僕たちは3つの課題をもってベラルーシに行きましたがどの課題もすべて達成できました。僕は特に3つ目の課題である「福島の復興に役立てることが出来る何かを持ち帰る」ことを一番達成できたと思います。

ベラルーシではチェルノブイリ原発事故の影響で入ることが出来なくなった汚染地域に人を呼び込む工夫、例えばそこで働く人の給料を上げたり引っ越しを無料にしたり子供に無料の健康診断を提供したりすることが施されていて、福島では地元の人が自分たちで地元を前の姿に戻そうと努力しているのに対しベラルーシでは他地区・地域から人を呼び込みその人たちと新たな組織や地元を作っているように感じました。

またベラルーシにはプラレスカのような保養施設が多くあり福島にも保養施設のようなものがあれば復興の力になると思いました。プラレスカでは子供たちが仲良く元気よくすくすく生活する環境が整っていて僕が会った子供は皆笑顔でいました。子供が元気に育つことや笑顔でいることは今後の復興の大きな力になると思います。また、福島に保養施設を作り子供たちがそこでいろいろな人と会いそこで生活を共にするうえでコミュニケーション力や協調性が育ち、大人になって保養施設で一緒だった仲間が集まって一緒に福島を復興させることが出来るのではないかも思いました。

ベラルーシでは福島では行われていない政策が行われていてとても新鮮でした。今後に生かせるものを多く吸収できたと思います。とても貴重で為になる時間をベラルーシで過ごすことが出来てとても嬉しいです。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

僕の将来の夢は外務省に入り外交官になって海外に住む日本人を助けたり日本とほかの国との関係を築いたりすることです。そしてそのためには異文化理解やコミュニケーション力、リーダーシップが必要だと思っています。今回の派遣ではそのすべてを身に着けることが出来たと感じています。

日本の食べ物が食べられなかったり風呂やトイレが日本様式でなかったりと10日間日本の生活から離れベラルーシの文化を直接感じながら過ごす中で、生活も違えば考え方も変わるという事を改めて実感しました。これは今後僕が会う様々な国の人とお互いを理解し合うために必要なことであるので良かったです。

日本の文化をショッピングモールや保養施設、中等学校で紹介する中で言葉が通じない人や少ししか自分の言っていることが伝わらない人と接する機会が多くありました。そこで自分が言いたいことを身振り手振りや表情でどうにか伝えることがどれだけ難しいか気づかされました。ですが一番大切なのは相手に思いを伝えたいという明るい気持ちや常に持ち決して後ろ向きな感情をもたないという事であると気づきました。明るい気持ちで接すると楽しいコミュニケーションが生まれ、相手は自分が伝えたいことを頑張って理解しようとしてくれるという事です。このことに気づいたことで僕のコミュニケーション力は向上したと思います。

プレゼンでどのような方法がベラルーシの人が理解しやすいか考えたり、スムーズな作業を行うために班のメンバーに指示を出したりする中でリーダーという役職の難しさを実感しました。そしてリーダーとはただ人をまとめる役ではなく、代表として責任を持ち、メンバーをまとめながらも支え、メンバーから頼りになる存在である人であると思いました。今後僕は様々な団体に属しそこで何か課題を進めるという事が多くあるでしょう、その時に今回知ったリーダーのあるべき姿を意識して周りをまとめられればいいなと思います。

今回、今後の生活で生かすことのできる3つの力を学び高めることが出来ました。これからこの力を使い良いリーダー、良い人材になるため頑張っていきたいです。そして少しでも福島を復興の力になれるように頑張ります。

● 荒川 祐太（磐城桜が丘高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私がこの企画に参加した理由ですが、芳賀くんに「ベラルーシに行かない？」と誘われたためです。最初に思ったことは、「ベラルーシって、どこにあるんだろう。」でした。どんなとこかも分からないところ、しかも海外であったので最初はとても不安でした。そして二ツ沼総合公園で行われた合同合宿。周りは自分の学校の人以外皆面識のない人でこれもまた不安でした。しかし、D班の皆は明るく、フレンドリーでこれならば大丈夫かなと思いました。そんな気持ちで迎えたベラルーシ初日。首都ミンスクを観光して思ったことは、「とても発展している」ということでした。街並みを見ても綺麗でしたし、道も整備されていていわきなんかよりも都会だ！というのが最初の印象でした。そのまま楽しい観光のかなと思いきや、一番大事で大変なものがありました。そう、プレゼンテーションです。D班は「日本の文化」という題材でのプレゼンでしたが、最初のうちにある程度の方向性がきまっていたので、そこに肉付けしていく形でなんとか早いうちに完成させることが出来ました。夜遅くまで起きて準備した日のことを昨日のこのように思い出せます。

ゴメリ大学でのアヴェリン先生の講話では、福島第一原発事故からの福島を復興に役立つようなチェルノブイリ原発事故からのベラルーシの復興のお話を聞くことが出来て良い経験だったと思います。汚染区域の手前まで行った時、なにか心にかみ上がってくるものがあったような気がしました。後半の日程は戦争についての活動が多くなり、博物館にも行きました。佐藤くんがテンションMAXだったのを横目に、ベラルーシの戦争についてよく学べたと思います。原発事故のことも、戦争のことも、同じく風化させてはいけない、これからの未来にしっかりと伝承していかなければならないのだと思います。それを、今回の活動で学ぶことが出来ました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回の活動でこれからの生活に活かしていきたいことは、大きくわけて二つあります。

まず1つ目は、これからの学校生活に活かしたいこと。今回の派遣で学んだことの一つに、友達との交流の大切さ、偉大さでした。班活動でもそうでしたし、プレゼンテーションの時にも班のメンバーのみんなの力はとても大きかったと思います。PowerPointを作ってくれた人、原稿をWordにまとめてくれた人。大まかな方針を決めてくれた人など、多くのメンバーの支えがあって、プレゼンは成功させることが出来たのではないのかなと今でもそう思います。このことは学校生活にも活かせるのではないかなと思います。まずはクラスメイトとの交流。私の高校ではもうすぐ校内体育大会が行われます。その時に重要になってくるのがクラスメイトとの一致団結です。そこで今回学んだ交流を大事にする心。これがあればきっと校内体育大会はベラルーシ派遣でのヨサコイやプレゼンのように、いい結果で終わられると確信しています。

もうひとつ学校生活に活かすためのことを、学べました。それは積極性の大事さです。私は去年の高校生活で積極性をあまり重要視していませんでした。誰かがやってくれるから自分はいい。などと思っていたこともありました。

しかし、今回の派遣でその考え方が180度反転しました。自分から進んで物事に取り組みもうという気が起こりました。私はいま桜が丘高校生徒会で監査の役職についていますが、2年生として後輩を引っ張っていく上でこの積極性は、活かしていけるなと思いました。

そして2つ目はこれから未来に活かしていきたいことです。それは、「過去の悲惨な出来事を風化させない」ということです。ベラルーシでは、チェルノブイリ原発事故のお話や戦争についてのお話を聞く機会がたくさんありました。日本も福島第一原発事故や太平洋戦争など、重なるところが多いと思います。これからは終戦記念日もありますし、このような過去の悲惨な出来事を風化させないということは、これから生きていく私たちに課せられた義務だと思えます。これらの2つをこれからの生活に活かし、より良くしていきたいと思えます。

● 森谷 友星（ふたば未来学園高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私がベラルーシミッションで学んだことは大きく分けて2つあります。

1つ目は、自分から積極的にコミュニケーションをとることの大切さです。このベラルーシミッションでは、各班ごとにテーマが設定され、そのテーマでパワーポイントを作成しプレゼンテーションをするという目標がありました。私は、静かでおとなしい性格で人と話すことが苦手だったので班の中に馴染めずパワーポイント作成にあまり貢献できていませんでした。このままではダメだと思い、勇気を持って自分の意見を言ってみると班のメンバーが私の意見に納得してくれました。その時から私は班での話し合いの際に積極的に自分の意見を言えるようになりました。班の人たちとは初対面で全く知らない人たちでしたが自分からコミュニケーションをとることによって、その班に馴染むことができたと思います。自信を持って私は自分の班のメンバーだけでなくそれ以外の班のメンバーとも積極的にコミュニケーションをとり、プレゼンテーションに向けての意見交換をしました。班どうしお互いの良いところを褒めあったり悪いところを指摘し合うことにより、物事を客観的に捉えることができました。その結果、パワーポイント作成では新たな思いつきがあったり、プレゼンテーションをする際、聞き手がわかりやすいボディランゲージの仕方などを知ることができました。多くの人とコミュニケーションをとることにより練習の時より質のいいプレゼンテーションをすることができたと思います。

2つ目は、チェルノブイリ原発事故についてです。私はチェルノブイリ原発事故と聞いて、名前は知っていたものの、その事故の詳細については事前研修の時に学習した程度で少しの知識しかありませんでした。その中で、ベラルーシに行き、実際にその事故を体験した人から話を聞いてみると、私が思っていたものとは全くと言っていいほど違うものでした。国立ゴメリ大学でアヴェリン教授の講義を受けた時に彼は事故から32年たった今でも当時の事故ことを鮮明に覚えていると言っていました。復興に一番大事なことは、正しい情報提供をする。そして、ベラルーシではこれからインターネットや電子掲示板などを使い色々な地域の人たちに合わせた情報提供をして、地域の人たちから質問があれば専門家が答えるという政策が進んでいるそうです。このような政策は福島でも取り入れたほうが良いと感じました。

ホイニキ博物館に行き、事故があった時実際に使われていた、除染作業服や線量計、当時撮られ多くの残酷な写真の数々を見ました。チェルノブイリ原発事故は私が思ってたより遥かに被害の大きいものだと感じました。

私は福島復興への一番の「カギ」となるのは情報発信だと思います。なぜなら、いま福島で一番問題視されていることが風評被害だからです。風評被害がなぜ起こるのか、それは間違った情報発信や福島に対する誤解だと思います。それをなくすには正しい情報を発信し福島への誤解を解くこのことが大事だと思います。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

ベラルーシに行き私は数え切れないほど学習するきっかけに出会いました。事前研修の時、ベラルーシについて学習したくらいではほほらかない国に行く、ぼくにとって大きな挑戦でした。ベラルーシに行ってみて福島復興へのヒントをたくさん得ることができました。実際にその場所に行き、原発事故を体験した人に直接話を聞いてみることで、インターネットなどで調べただけではわからない何かを得ることができたのだと思いました。

今回の経験は私にとって大きな力となりました。今回学んだことを多くの人に伝える努力をして、福島復興への役に立つことができると思います。そして、「挑戦する心」を忘れずにこれからも色々なことに挑戦して行きたいです。

● 青田 美桜（相馬農業高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回の日本・ベラルーシ友好訪問団2018に参加してみて、ベラルーシの文化や自然、チェルノブイリ原発事故、ポーランド・ソ連戦争について、そして、ベラルーシとは違う日本の現状や政策、文化についても学びました。ベラルーシと日本の違いを考えると同時に今までの自分から大きく変わるきっかけにもなったと考えます。この事業を通して私の中で2つ大きく学んだことがあります。

1つは、渡航前からのプレゼンテーションの準備とその発表の中で、私はコミュニケーションの大切さとリーダーシップのすごさを学びました。私はD班で日本の文化についてプレゼンテーションを行いました。緊張していた私に声を掛けてくれたりアドバイスをしたりしてくれたメンバーやD班をまとめて引っ張ってくれたリーダーさんの姿を見て、私は本当に情けないと感じました。そして自分も見習わなければいけないと思いました。ここまでこられたのは、班のメンバーときちんとコミュニケーションを取ることが出来き、事業が進む中で「誘われた

からやる」ではなく、「自分でやる」と気持ちを変えられたからかもしれません。そして、プレゼンテーションをまとめていく中で班を引っ張っていったリーダーさんのリーダーシップのすごさを今一度感じました。

もう1つは、チェルノブイリ原発事故に関する博物館や保護区ゲート、ポーランド・ソ連戦争についての戦争博物館と慰霊碑、そしてアヴェリン先生の講義を聞いて日本とベラルーシの政策の違いや考え方の違いを学びました。博物館では、チェルノブイリ原発事故当時の現状が鮮明に残っていました。そして、ストレリチェボ中等学校では学校内で放射線を測定していて、大人だけではなく今の人たちまで強い考えが残っていて、本当に日本とは違う考えをもっていました。戦争の慰霊碑では30秒おきに鐘がなったり焼かれて無くなってしまった村や町のオブジェがあったりと改めて戦争の苦しみや痛みが分かった気がしました。そして、「今は本当に幸せなんだなぁ」と改めて感じました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回の事業を通して、日本とベラルーシの原発事故の現状や文化の違い、そしてコミュニケーションの大切さなどたくさんのを学びました。それを今度はこれからの高校生活や進路、就職活動に生かしたいと考えています。高校生で海外の長期研修に参加できるのはめったにないことです。日常生活では気づくことができなかつたことばかりでした。それに初めてやったこともたくさんありました。これからも学んだことを生かして生活していきたいです。このような体験をさせていただいた事を本当にありがとうございました。

● 中田 葵（磐城高等学校）

■最も印象深かったこと・興味を持ったこと

「ハティニと虐殺、ベラルーシの悲劇について」

この派遣プログラムの中で、最も深く印象に残ったのはハティニの見学である。

もともと私は戦争関係の歴史に興味があり、日本だけでなく他国の戦時中の様子を知りたいと思っていた。ベラルーシは日本から遠く離れており、戦った相手も戦場も違う。そもそも私はベラルーシのことを全く知らなかつたし、行ってみるまでは戦争被害が大きかつたなど見当もつかなかつた。今回訪問したことにより、ヨーロッパの戦場を知り、そして虐殺や戦争の恐ろしさについて改めて感じさせられた。

ハティニに着いてます、ぞっとするような静けさを感じた。この広場では、30秒に一度追悼の鐘が鳴る。その音が静かな広場に響くたびに、ここで多くの人が虐殺されたという歴史的事実に心が痛めつけられた。私たちは、各モニュメントの前で説明を聞き、様々な事を学んだ。この村の人々は、一つの小屋に押し込められて火をつけられ虐殺されたこと。逃げようとするれば、外にいるドイツ兵に機関銃で容赦なく撃たれたこと。被害者で最も幼かつたのは、生後7週間の赤ちゃんだつたこと。ベラルーシには強制収容所が多かつたこと。ベラルーシ人口の75%は殺される計画であつたこと。生かされたとしても、強制労働や血液ドナーとしてドイツ兵に利用されたこと。この他にも、多くの残虐な事実を知つた。ただただ、心苦しかつた。私たち日本人には、直接人の手によって与えられた「虐殺」というものにあまり馴染みがない。戦場が大陸国であるがゆえの苦しみがひしひしと伝わつてきた。

ハティニは、ベラルーシがヨーロッパの中で特に戦争の被害が大きかつたことを示し、戦争を後世に伝えていこうという意思を感じさせるものだつた。ハティニの銅像「不屈の人」はまさにそれを強く象徴していると思う。戦争は、何も利益を生み出さない。ハティニの「永遠の火」の前で黙禱をささげながら、もう二度と戦争が起こりませんように、そしてこのような虐殺がありませんようにと、強く願つた。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

この派遣事業への参加は、私にとって初となる海外へのチャレンジであつた。日本を飛び出し、遠い異国の地で学び感じた多くのことは、これから社会に出て生きていく私を創る上で、大切な要素となるものばかりだつた。

私を得たものは大きく分けて2つある。1つは、どうしたら分かりやすく人に伝えられるプレゼンを作れるか、ということ。私の所属していたD班は特に、これについて深く考えたと思う。今回プレゼンをする対象となるのは、外国の方々であつた。いくら通訳があつたとしても、全てがそのまま伝わるわけではない。私たちは、いくつかの壁を乗り越えなければ伝えたいことが伝わらない苦勞を味わつた。しかし、それらを乗り越えられれば、観客の心をつかんだプレゼンが出来るということも同時に知ることが出来た。この経験は、普段通りの生活をしている中でも大切になってくる。自分の意見をいかに相手に伝わりやすく出来るか。論理的にならず、相手の心に響くようなスピーチが出来るか。「言語」という大きな壁を知つた私たちなら、「伝える」ことについてのスキルがついたのではないかと思う。

もう1つは、私の将来に向けて進む道である。これは少し話したことになるが、私はもともとロシア語に興味を持っていた。その興味が一気に膨らんだのがこの派遣である。私は将来何をしたいか、はっきりとは決めていながつた。しかし今回の派遣で、「ベラルーシをもう一度訪れたい」という夢を持つた。そのためにも私は、ロシア語を学ぶ、という大きな目標を立てることが出来たのである。大学で学ぶことになるかはまだ分からないが、ロシア語を習得して、いつか必ずベラルーシに行きたい。ベラルーシは、私にとって憧れの地となつた。

他にも、ささいな事ではあるが気付かされたこと、得たものが多くあつた。それを今後どう生かしていくかはこれからの私次第である。この素晴らしい経験を糧にして、一歩でも多く前に進めるよう努力していきたいと思う。

【E班】

● 金成 李胡（磐城桜が丘高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

今回、この研修で学んだことは3つあります。

1つ目は人と人とのつながりです。事故があつたからではなく、以前よりもつながりが深くなつたと感じました。国立ゴメリ大学のアヴェリン教授の講義で、福島原発事故が起きた時、何とか助けたいと思つたと聞きました。日本に合つた方法が必要だけどベラルーシの対応が役立つため政府に伝えたそうです。チェルノブイリ事故の時日本は最初に助けた国の1つであり、経済・農業・国民性は違つけれど助けたいという思いが強かつたとわかりました。ベラルーシでは隣国の事故の被害であり、人々は何があつたかも分からず避難をしたり、家族が離れ離れになつてしまつたりと、情報が行き届かないことがあつました。現在事故を経験した人は少なく、また事故について何か考えている人も少なく、経験を誰かに伝えるという機会は用いていません。思い出すとつらく時間がたつているため忘れつつあります。福島とも受け止め方が違つたため、ベラルーシでは昔よりも今を語りたいという思いが強いとわかりました。福島では、経験した私たちが後世に伝え、将来に残しておくことも大切だと思つました。また、様々な場所で日本文化紹介をした時、多くの人に興味をもつていただき、遠く離れている国だけどつながりを感じられました。日本語で話しかけてくれる人もいたり、人と人は必ずどこかでつながっていると実感しました。

2つ目は努力することの大切さです。当たり前のことですが、今回改めて実感しました。プレゼンテーションで、私たちのグループは「福島の災害と復興」のテーマで、最初事実だけを述べていました。しかし事実は調べればすぐわかると言われ、自分たちの考えを尊重することになりました。先生たちにアドバイスをもらいながら何度も考え直し、最後の発表では今まで以上のものを仕上げることができました。努力があつてこそこのことで、このプレゼンテーションを通して当たり前のことを見直すことができました。人前で話すことが苦手だつた私でも、伝えたいという思いをもって努力を大切にしたことで良い経験になり、これからのためになりました。

3つ目は、ベラルーシの人の優しさです。日本人が親切なのは実感していましたが、ベラルーシの人はどうだろうと不安があつました。しかし、実際に会つてみるととても親切で、ロシア語がわからない私にも丁寧に優しく接してくれました。原発の被害を受けたにも関わらず人々が明るく、福島も良い方向に向かって進むべきだと思つました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

今回海外に行くことが初めて、ベラルーシという国を知つたことも初めてでした。しかしこの経験をして、これからのためになることばかりが見つかりました。福島は原発事故の被害を忘れてはいけないとばかり思つていますが、それだけではいけません。忘れないことはもちろん、ベラルーシのように今を伝えることも大切だと思つました。また、言葉が通じなくても気持ちは通じ合えるとわかつたため、周りの人々とコミュニケーションをとり、今まで以上に相手のことを考え、相手の立場になりたいと思つました。海外で学んだからこそ気づいた当たり前のことを、これからの生活に活かしたいと思つました。笑顔を忘れず、自分が思うことはしっかり伝え、でも相手のことを尊重してベラルーシのように人々が安心して明るく過ごせるようにしたいです。今すぐには難しいけれど、実際に行つて感じたからこそ、行つて学んで終わりではなく、このことをこれからの活かすことが今必要だと思つました。ベラルーシの事故の被害のことも、事実しか知らない人が多いと思つます。実際に経験した人からの話を忘れず、これからの福島のために私たちが伝えなければならぬと思つました。自分のためだけでなく誰かのためになること、今まで当たり前だと思つていたけどそのことも大切にしていきたいと思つました。この研修で学んだこと一つ一つが今の私に必要です。将来機会があればまたベラルーシにいき、いけなくてもこの経験を活かして、何か恩返しをしたいと思つました。

● 坂本 穂香（新地高等学校）

■最も印象に残つたこと・興味を持ったこと

私が一番印象に残つたことは、ショッピングモールでのソーラン節です。みんなで毎朝練習を頑張つた成果を出せることが出来たからです。手拍子でのつてくれたりアンコールをくれたりと、とても達成感を感じられる時間でした。頑張つて良かったなと思つました。みんなと一体感が生まれ笑顔で終われたことは、嬉しかつたです。この他にもいくつか印象に残つたことがあります。プラレスカの保養施設やストレリチェボ中等学校での交流です。子供たちと交流しながら文化を学ディスコは特に楽しかつたです。みんなフレンドリーですぐ仲良くなることができ、良い思い出が出来ました。最後にプレゼンです。何時間も班のみんなと話し合い完成したものを、発表できたことはとても良い経験になりました。人見知りの私は上手くいくか不安でした。しかし、みんな優しく10日間楽しく過ごすことが出来ました。スタッフの皆さんや大学生の皆さんに支えてもらい、乗り越えられたこともありました。

興味を持ったことは、ベラルーシです。私は、どんな国でどこにあるのか知りませんでした。しかし、今回の研修で知ることが出来ました。色々な方々のお話を聞いてチェルノブイリ原発事故について学べました。ハティニやホイニキの博物館でベラルーシの歴史についてもわかりました。いかにベラルーシが被害を受け、悲惨な状態になつてしまつたか分かりました。そして、実際に訪れたからこそ良さなどがわかつたと思つます。ベラルーシはとてもまちなみが綺麗で緑が多く、自然豊かだと感じました。ベラルーシ人は優しく私たちを迎え入れてくれました。その温かさ心惹かれました。また、酪農が盛んなため、チーズやじゃがいもはとても美味しかつたです。ベラルーシは素晴らしい国だと思つたので、多くの人に知ってもらい訪れて自分で見て、魅力を感じて欲しいです。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私はベラルーシについてあまり知りませんでした。しかし、今回の研修でチェルノブイリ原発事故についてだけでなく、ベラルーシの良さを知ることが出来ました。ホイニキ地区の博物館やハティニなど実際に訪れて、自分自身で知り学ぶことが出来たと思います。ポーシ工放射線環境保護区ゲート前に行けたことは、とても貴重な経験をしました。ストレリチェボ中等学校には、放射線クラブがあり積極的に食品の安全性を調べていることを知りました。線量測定に力を入れているため、ベラルーシの食品は安全なことが分かりました。チェルノブイリ原発事故を良く知っている方々から実際に聞いた事実を、まずは周りの人からそして少しでも多くの人に伝えられるように努力していきたいです。また、ベラルーシを知らない人は多くいると思うのでベラルーシの良さも伝えていきたいです。この研修に参加したことは、今思えば良かったと思いました。私にとってこの研修は、成長できた良い経験になりました。

● 真田 未夢 （原町高等学校）

■ベラルーシミッションで学んだこと

私はこの研修を通して、特に 2 つの事について学びました。今回、班の皆と、最終的にベラルーシの人々にプレゼンテーションで福島のことについて発表しなくてはなりませんでした。私はその発表を初め甘く見ていました。ただ、福島について班で思ったことを読み上げれば良いだろうと勝手に思っていました。しかし、発表の練習を重ねてスタッフや先生から指摘を貰っていくうちに、外国人に伝える難しさを気づかされました。そして、同時に福島の実状について改めて詳しく知ることも出来ました。

私の班はスタッフや先生から指摘やアドバイスを貰ったら、その日のうちに修正をし、話し合っていました。その話し合いの中で、周りの子の積極的な姿勢を見て、とても感心しました。私は自分の経験、意見は言うものの、その後、どうまとめるか、どこを削るかなどの話に入ると、いつの間にか人に任せっきりになっていました。しかし、何らかの面で班の役に立ちたいと思い、班の雰囲気や調べる所で自分なりに 1 歩前に出ました。自分の協調性の向上としては、とても成長出来たと思います。アドバイスの中で、ベラルーシ人はこの単語は分からないというアドバイスを貰いました。日本人が当たり前に分かる単語でも、ベラルーシ人に伝わらないという事があるんだと初めて分かりました。ベラルーシの人々にどうやったら、この単語の意味が伝わるか、それに加え、福島の実状も詳しく分かりやすく伝えないといけないという所で外国人に伝える難しさを学びました。本番の発表では、動画や画像に頼り、人々に伝える事が出来ました。

私は福島出身でありながら、この研修で発表の準備をするまで、福島の復興についてあまり知りませんでした。福島は復興するために、大型ショッピングモールの建設など沢山のことに取り組んでいる事が分かりました。この研修でチェルノブイリ事故以外にも沢山の事を肌で直接感じて、学べる事が出来て良かったです。とても良い経験になりました。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

私は海外に行くのが初めてだったので、出発するまでは、ベラルーシでの食事や生活が不安でした。しかし、ベラルーシで過ごしていくうちに不安もなくなり、ベラルーシの生活にすぐ馴染めました。ベラルーシミッションが全て終わってみると、とても内容の濃い時間を過ごすことが出来たと実感しました。この 12 日間がとても短く感じました。私はこの研修で高校生 23 人はもちろん、現地の子供たち、大学生、沢山の友達に出会いました。そして、沢山の友達とコミュニケーションを取ることが出来ました。元々海外にとっても興味があったので、自分が実際に海外に行って現地の方々少しでも会話が出来るととても心が弾みました。私は現地の言語など話せませんが、笑顔やジェスチャー、簡単な英語などで会話が出来て、とても嬉しかったです。この事があり、私は将来、人と接する仕事に就きたいと改めて考え直すことが出来ました。人とのコミュニケーション力も、とても付いたと思います。これから、沢山の友達と出会うと思うので沢山の人と会話をしていきたいです。

あと、先程の話にも出ましたが、プレゼンテーションの話し合いで沢山の意見を述べることは出来たので、自分の意見や周りの意見をまとめられるようにこれから努力して、学校や将来に積極的な姿勢で取り組むようにしていきたいです。これからの学校の授業で自分の意見を述べて、どんどん授業に積極的に取り組んでいきたいです。

● 中丸 朋香 （磐城高等学校）

■最も印象深かったこと・興味を持ったこと

私がベラルーシミッションで一番印象に残ったことは、ベラルーシの人たちがとてもフレンドリーで親切だったことと、子どもたちが自ら放射線について学んでいたことです。

ブラレスカやストレリチェボ中等学校を訪問した時、子どもたちは私たちを温かく迎えてくれました。話す言葉は違うけれど、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれたので、一緒に活動するのがとても楽しくて、時間をわすれてしまうほどでした。ベラルーシの人の温かいところは日本人に似ていると感じました。ミンスク市内を自由観光した日も、町を歩いていると、知らない人同士でも疑問に思ったことがあれば会話をしたり、実際に私たちも、高校生ですか？と尋ねられたりしました。日本では知らない人とはあまり会話をしませんが、ベラルーシのように普段から多くの人と話すのは良い習慣だと思います。

ストレリチェボ中等学校には放射線クラブというものがあります。放射線クラブでは、放射線について学習し、自分たちが食べる食べ物の放射線量を測定して、自分の目で安全だということを確認しています。私は以前、何の根拠もなく放射線は危険で怖いものだと思っていました。福島にも私と同じように放射線に偏見を持っている人は少なくないと思います。しかし、放射線クラブの生徒たちは、自分で安全だと確認し

ているから放射線は怖くないと話していました。勝手なイメージで決めつけるのではなく、自ら行動を起こしている姿に私は刺激を受けました。そして、そのような取り組みを福島にも広めていきたいです。

この他にも、ベラルーシの歴史ある場所の見学や、プレゼンテーションの発表を通して、ベラルーシの文化や歴史、日本との違いを学んだり、素敵な街並みを見たり、多くの人と関わったりしたことで、ベラルーシという国が大好きになりました。今回の経験を将来に生かして、またベラルーシに来たいです。

■今回の経験を今後、どのように活かしていきたいか

ベラルーシミッションではたくさんのことを学びました。私は、この経験を普段の生活の中、そして将来に生かしていきたいです。どんな人とも積極的にコミュニケーションをとること、文化の違いを大切にすること、自分の意見を正確に伝えること、ベラルーシで学んだ放射線の知識を福島の人に伝えることなど、ここに書ききれないほど、生かしたいことはたくさんあります。

ですが、私はこのミッションで、自分の思いを相手に伝えることの大切さを強く学びました。このことを教えてくれたのは、ミッションの中で一番大変だったプレゼンテーションの発表です。自分たちで一から情報を集め、伝えたいことをまとめ、どうすればわかってもらえるのかを考えてプレゼンを何度も何度も作り直しました。スライドをつくるよりも、発表の仕方を工夫して話すほうが大変でした。暗い話と明るい話の声のトーンを変えることや、視線を意識することなどに注意して発表しました。本番は会場にたくさんのお客さんに来ていただいて、少し緊張しましたが、練習よりも良い発表ができましたと思います。会場のお客さんが、真剣に、私たちの発表を聞いてくださったので、日本、福島のことや、私たちの考えは少しでも伝わったのではないかと思います。プレゼンが大成功したのは、嫌になるくらいアドバイスをしてくださったスタッフの皆さんや、一緒にプレゼンを頑張ってきたメンバー 24 人全員のおかげです。本当にありがとうございました。このプレゼンで学んだ思いの伝え方を、生活の中で生かしていきたいです。

今回の研修で、私は大きく成長できたと思います。ベラルーシでたくさんものを見て、原発事故のことや、文化についても考えを深められたし、多くの素敵な人の話を聞いたり、関わったりして、自分の将来を考え直そうと思いました。この貴重な体験を生かして、将来福島や日本に貢献します。

高校生がまとめたベスト 10

■あなたが考える「リーダー」が必要とする要素

【1 位】コミュニケーション能力

- みんなが気持ちよく作業を進められるよう、場を盛り上げることも重要だから。
- 誰とでも、どこでも、いつでも、話す、聞く、などのコミュニケーションをとれることが大切である。
- みんなを繋げるコミュニケーション能力が必要。
- 人は色々な性格の人がいる。なのでそれを上手く活用するにはよく話すことが必要となると思う。
- 話すことが出来ないとも出来ないから。
- チーム全員に自分の意思を伝えるのはもちろん、誰かの前で発表する際に全体に伝えるのにもコミュニケーション能力が必要だと思うから
- 相手に対して理解を深められるから。相手からたくさん話を聞き出せるように。

【2 位】責任感

- 自分や同じ班の人のミスも、統率を取っているリーダーの責任。代表して責任を取らなくてはいけないから。
- 最後まで成し遂げることが大事だから。
- 無責任だと何でもかんでも適当になるから
- 言ったことに責任を持たなければ皆信用しないから。
- 責任感があると信頼が生まれる。責任感がないと周りはずいてきてくれない。
- 自分がしたことに責任をもち、一つ一つの仕事をやりとげることが必要だから。

【3 位】広い視野・広い心

- 班の人の行動にイライラすることもあるかもしれないが、それでも平常心でみんなをまとめなくてはいけないから。
- 仲間のどんな意見も受け止める必要があるから
- 仲間が困っている時に手を差し伸べるのがリーダーである。
- 人をまとめる際に色々なから言われることがあると思う。しかし、それを上手く流すほどの心が上になつには必要であると思う。

【4 位】気配り

- 周りの人がどういう状態かを把握することで、次の行動を考える必要があるから
- 自分勝手な人だと話を聞きたくなくなるから
- 人の上に立つものとして自分中心にならないようにする

- 自分のことだけでなく相手のことを考えることが必要だから。周りをよく見れる人こそ必要だと思う。

【5 位】積極性

- リーダーから意見を出さなければ、会議も進まないから
- 何事に対しても、まずは自分から、他人より自分から進んで行って行くことが必要である。
- 自分からやるという意識がなければ仲間もついてこないから。
- 何かをする時自分からする勇気が必要だから。積極性があることで引っ張っていけると思うから。

【6 位】行動力

- 言っているだけではついていきたいと思わないから。
- 自ら行動する事こそ周りを動かすと思うから
- 人よりも素早く動き対応できるようにすべき
- 誰かに頼ることも大切だけど、自分が引っ張ることも大切だから。行動力をつければ、リーダーとして周りを引っ張ることができる。

【6 位】聞く力

- 人の話を聞いてその人を伸ばしてあげることも大切だから
- 周りの人の意見をしっかりと聞いてそれを取り入れることが必要になってくると思うから
- これはメンバーの意見や考えを聞くという事だけでなく、自分が分からないところをどのようにすればいいかメンバーに聞くことや大人のアドバイスや指示を素直に聞く力の事。
- 人の話をよく聞いて理解する力が必要

【7 位】判断力

- 何が必要で必要でないのか、その場で判断することが必要である。
- いざという局面に遭遇した時などに頼りになるから。
- 仲間の意見を聞いて話し合っても、最終的に判断するのはリーダーの役目。状況や方向性を的確に判断できる力が必要だと思う。

【7 位】信頼性

- この人についていきたいと思ってもらうことが大事だから。
- 信用されないリーダーには誰もついてこないから
- 周りから信頼されてこそ、頼られ、まとめられるから。

【1位】 被災地を回るツアーを計画

【7位】 ポジティブシンキング性

- 人の可能性を広げてあげられる
- 人間なので失敗することはある。なので前を向く、前を向かすことが大事だと思う。
- 大変なことや、おもしろくないことでも楽しくできるように。

【8位】 笑顔

- どんな状況下でも、仲間を不安にさせないために
- 自分だけでなく周りも笑顔にすることで、雰囲気明るくなり、まとまることできるから。また、コミュニケーションをとりやすくなり、多くの人と関われるから。

【8位】 計画性

- 時間は有限なので上手く成功させるには計画性がないといけないから。
- メンバーに作業の指示を出すときに必要になる力の事。スムーズで効率の良い作業を行うために最も必要。

【9位】 被災地を回るツアーを計画

■ 12日間の研修を終えて、特に印象に残った行事

【1位】 プレゼンテーション（練習も踏まえて）

- 班の人、アドバイザーさんと修正を何度も繰り返し自分たちの納得のいく発表が出来たから。
- 深夜まで班で話し合いなどをして大変だったが、発表本番で大成功できた時の喜びはとても大きかったから。
- 最初は不安だったけれど最後はみんなで最高のものにできたから。
- ずっと練習してきたメインの活動だったから
- 準備をすこく頑張ったし、協力し発表が成功したから。
- 練習も準備も凄く辛かったけど、班の仲も深まり、自分の勉強にもなったので、結局やって良かったと思えたから。

【2位】 プラレスカ（ディスコ）

- たくさんの子供達と一緒に踊って交流が深まったから。
- 言語は通じなくても、踊りを通じてたくさんのお友達が出来たから。
- ベラルーシの曲に合わせてダンスを踊ったり、たくさんの人と交流することができたから。
- 現地の子どもと珍しい形で交流できたから
- ディスコをしている時間が一番笑顔で溢れていたから。

【2位】 最終日食事会

- 今回の経験をふまえ皆の思いを知れ、自分自身ベラルーシを通して学んだことなどを振り返ることが出来たから。
- 10日間研修でのこみ上げてくるものがあり、今回参加して本当に良かったという思いと、別れが悲しかったから。
- 最後の夕食を大学生とも話しながら食べられたから。
- デザートがとても美味しかったから。
- 最後の晚餐みたいで、とても悲しかったのが印象的だったから。

【2位】 ハティニ見学

- 残酷な殺され方をされた人々や、ベラルーシの歴史について知れたから。
- 実際に何が起きたかが、とてもわかりやすいように建築物が建っていたから。
- 戦争の悲惨さが伝わってきたから
- いかにベラルーシの被害が大きく大変だったか学べたから。
- 第二次世界大戦の事をとても詳しく聞けたのと、お墓を見て、とても心がじーんとなったから。

【2位】 発表会（ソーラン節、日本文化紹介）

- アンコールでは一緒に踊ってくれる人もいて、今までの中で1番笑顔で楽しく踊ることが出来たから。
- ベラルーシの人を喜ばせることが出来て、達成感が感じられたから。
- みんなの団結力を高められた行事だったから
- 達成感を感じられた。すごく盛り上がっていたし、楽しかったから。
- 日本文化紹介の時、浴衣のお手伝いと共に浴衣の着付け方も学び、沢山の人がありがたうと日本語で言われたから。ソーラン節がいままで一番声が出ていて、とても楽しかったから。

【3位】 班別自由散策

- カーチャさんの家でご飯を食べ、班の人や学生アシスタントの人とたくさん話することが出来たから。
- 班で遊園地やショッピングできたことが楽しかった。
- カーチャさんの家に行って、ベラルーシ人の生活を体験できたから。
- ターニャの家族がとても温かく、感動した。そして、班で活動した時間が1番長く濃い思い出になったから。

【3位】 ミンスク市内観光

- ミンスクの街並みはとても興味深い施設がたくさんあったから。
- 単純に楽しかったから
- 楽しみにしていた一つ、ダイヤモンド型の図書館を見られて嬉しかったから。
- 初めて海外でちゃんと周りを見渡せて、ワクワクしたから。

【4位】 バレリーナ大野麻佑子さん講話

- 言葉も分からなく1人でバレリーナとしてベラルーシで頑張っている姿に勇気づけられたから。
- 自分の話をしながら、私たちのこれからについてアドバイスをもらえたから。
- 2つの夢を叶える気持ちがかっこいいと思ったから。

【4位】 ネスヴィシ城見学

- ドイツの病院になったりしたことが印象に残ったから。
- とっても広くて綺麗で色々なものを見られて良かったから。
- お土産買うところが沢山あって、買い物楽しかったから。

【4位】 戦争博物館見学

- 戦争の悲惨さが伝わってきたから。
- ベラルーシで起きた悲劇を詳しく知れたから。
- 歴史に興味があって、ベラルーシの歴史について学べたから。

【5位】 ゴメリ大学アヴェリン先生講話

- 生徒の質問にも一つ一つ丁寧に説明してくれて、アヴェリン先生の意見も聞くことが出来貴重な体験になったから。
- 当事者の生の声を聴くことができたから。

【5位】 ポレーシエ放射線環境保護区ゲート訪問

- 0.45ミリシーベルトある場所だったので、チェルノブイリの怖さを感じたから。
- 中々行けないところに行けて、とても良い経験が出来たから。

【5位】 ストレリチェボ中学校訪問

- 日本とベラルーシの学校の違いを知れたから。
- 放射線クラブのプレゼンを聞き、生徒達の放射線に対する取り組み知り頑張っている姿に励まされたから。

【5位】 ホイニキ副市長講話

- チェルノブイリ事故当時の事を詳しく知れ、副市長さんの思いも知れたから。
- チェルノブイリ原発事故のことを詳しく知れたから。

【6位】 学生アシスタントプレゼンテーション

- 日本語で長文を読んで、私達にベラルーシについて伝えていて、とても嬉しかったのと、凄いなと思ったから。

【6位】 慰霊碑献花

- 消えてしまった村の名前が書いてあり、チェルノブイリ事故を肌で感じたから。

【6位】 プラレスカ訪問（日本文化紹介）

- ベラルーシの子供達に日本の文化に触れてもらったことが嬉しかったから。

【6位】 プラレスカ訪問（プラレスカ事業交流）

- ベラルーシ人は一人でも堂々と歌を歌っていたから。

【6位】 ホイニキ博物館見学

- チェルノブイリ原発事故のことを詳しく知れたから。

参加生徒 感想文

■過去の戦争や東日本大震災、福島第一原発事故の経験をどのように後世に伝えていくのかその方法

【1位】 歴史を学ぶ施設をつくる（資料館・博物館・モニュメントなど）

- いろんな人に原発事故についてわかりやすく学んでもらえるから。
- ベラルーシの戦争吐くのようなもの。
- 予算の面で見たら一番効率が悪いかど、人の目に当時の惨状を入れてもらうことによって記憶に残してもらうため。
- 危険な事故をもたらしたんだと伝えることができるようになる。
- 国に作ってもらい入場料を無料にし、日本各地に作る。またそこに専門家の先生を呼び興味のある人がいつでも専門家の先生に質問できるようにする。
- 実際の場所というのは何よりも大きな継承資料だと考えた。
- 日本の戦争や震災のことも実際に使われていたものと一緒に展示することで、いつまでも残っていくから。また、目で実際に見ることで伝わるから。
- その土地の偉人の銅像のようにモニュメントを作り過去のことを長く知ってもらう。ただ、人を不快にしては本末転倒なので不快にさせない程度でやるのが大切。
- 一目で過去を認識できるから。
- 「観光」という面で過去にあったことが身近になりやすいから。
- わかりやすくまとめると誰でもわかりやすいから・震災のおこった場所をそのままに置いて見せる。どのような悲惨な状況だったかを見せるため。
- 石碑を建てることで人々が興味を持ち調べることが出来るから。
- 人々が興味を持ち調べることが出来るから。
- ベラルーシには戦争に関する像が町に多くあったので、日本もそのようなものを作り忘れないようにする。

【2位】 学校教育に盛り込む（授業・教科書・避難訓練など）

- 知らない世代の人でも全世代が学べるから。
- 戦争や災害の知識を習得。教科書に載せれば効果的だから
- 戦争のことや阪神淡路大震災が載っているので、東日本大震災も過去にあった日本の出来事として取り上げてよいと思う。
- 知っていることが当たり前になるから。
- 自分達がその立場だったらどうするかなどを考えることが出来るから。
- このような出来事がまた起こるかもしれないから。また想像もできるから。
- 小学校や中学校の長期休みの絵や作文のコンクールとして、戦争・震災・原発事故のテーマのものを始める。それにより小さい子の関心を仰ぐ。
- 普段から災害を意識できると思うから。
- 小さい頃から放射線について学ぶことで、放射線についての知識を身につけるだけでなく、放射線を勉強していく中で過去の自然災害についても知ることができると思うから。
- 子どもたちに正しい教育をすることが継承の第一歩だと思う。
- 正しい知識を身に付けるために学習のカリキュラムとして災害授業を取り入れるべき。
- 小さい子は震災などをよく知らないため、学校で少しでも教えることで理解してもらい、大変さなど伝えられるから。これからのためにもなる。
- 中学校や高校にストレイチボにあった放射線クラブのような3.11 研究クラブや太平洋戦争研究クラブなどを作る。

【3位】 語り継ぐ（講演会など）

- 語り手を育成し全国各地に行ってもらい話してもらえば、福島に行かずとも原発事故について知ってもらえるから。
- 一番リアリティがあって、低予算でできるから。
- 外国の学者や企業に向けて、原発事故があった国で協力して二度と起きないように講演会を行う→同じ原発にあった国同士で協力して当時の状況や行ってきた解決策を共有しあう。
- 経験者が存命の間は、直接語り継ぐ 当事者の話が1番響くから。
- 生の人の声を聞くことでその時の残酷さを詳しく知ることが出来るから。
- 実体験を本人から聞くことでそれが心に残るから。
- 震災や戦争でどのような被害に会い、なぜ変わろうと思ったか知ることになり、結果的に戦争や震災の事を知ってもらうことにつながる。
- 次にこのような災害が起きた時の助けにもなると思うから。
- 原発事故の場合、実際に作業した人の話を聞くことで事故の悲惨さなどを感じられるから。

【4位】 映画や映像をつくる

- 教育にも使うことができるから。
- 今の情報化社会だからできることで、数十年後の技術ならどれだけ前の映

- 像でも鮮明なものにできると思うから。
- 紙媒体の内容を補足する意味が必要。
- 本よりはわかりやすいから。
- 馴染みやすい映画や漫画などは多くの人に見てもらえると思うから。
- 動画は想像しやすいから。
- 被害者が死んでも実際の証言として後世に残り、リアリティがあるから。
- 子どもでも見やすいと思うから。
- 作業員が亡くなってしまっても、その声をずっと次の世代に伝えることができるから。

【5位】 書籍・絵本・マンガなどを作る

- 講話のように、実際体験した人の話を載せる。
- 後世にも残せる、多くの人に読んでもらうことで知ってもらえる。
- 媒体化しておけばいつでも見られるから。
- 実際「はだしのゲン」や「いちえぶ」のようなマンガもあるし、小説よりも読みやすいから。
- 小さい子供でも分かりやすく理解することが出来るようになるから。
- 政府などの公的機関が介入し、戦時中または被災・事故当時の体験を詳細に記録する。
- 文字や映像資料として残り、誰でも閲覧可能な状態にする。
- 国民に広く知ってもらえるような状態を整備しておくべき。

【6位】 追悼式、慰霊式など定期的に行う

- 一度に多くの人に参加できる。事実を風化させないため。
- 地域ぐるみの活動が必要だと思うから。
- 震災や戦争について考えるきっかけになると思うから。
- 印象に残り、何十年先の人たちも過去にあったことを知り、忘れないと思うから。
- 日にちで覚えておくことで、将来ずっと残り、少しでも思い出せると思うから。

【7位】 話し合う機会を設ける

- 自分達がもしそのような状況になった時のことなど、話し合うことが出来るから。
- 意見を出し合うことで、災害時の行動の仕方、平和の大切さなどをより深く考えることができるから。
- 実際に体験していない人と実体験した人が容易に対話できるような環境作り
- 新鮮な視点、切り口からの質問などにより新たな体験談が得られると考えた
- 震災や原発事故で被災したという悪い面だけではなく、そこからどれだけ福島が復興の道をたどっているかを発信し、「震災」や「原発事故」という言葉にネガティブなイメージだけでなくポジティブなイメージもうつける。

【8位】 被災地を回るツアーを計画

- 原発事故からの復興をアピールすることもできるし、廃炉が完了していなくても、原発事故の実情を学んでもらえるから。
- 外国人は意外と日本で起こった凄惨な事実を知らない人が多いので、知ってもらうことが大事だと思う。また、ガイドを近隣に住む人にやってもらい、そうすることにより日本人も外国人の人も多くのものに理解を深められると思う。
- タイタニックのような感じで後世に残るからわかりやすいと思う。
- 実際に被災地に行く 百聞は一見にしかずとあるように、被災地はこれから残り続けると思うから、自分の目で見ておくことが大切だと思うから。

【8位】 インターネット

- SNSなどを使って、あったことを世界に拡散することで、忘れないようにする。
- 興味を持って調べようとする時に、実体験や事故、戦争についての正しい情報を得ることが大切だから。
- 戦争・震災・原発事故に関するウェブサイトを作り、そこでQ&Aを行えるようにしたり、掲示板を作って個人的に情報発信をできるようにしたりする。
- インターネットで発信すれば多くの人に伝わるから。しかし間違っている情報は見分けないといけない。

【9位】 特集番組（テレビ）を定期的に放送する

- 家でも全国の人に知ってもらえるから。
- 世代を問わず教えられることが出来るから。
- たくさんの人に見てもらえるから。

【10位】 ユネスコの世界遺産に登録してもらう

- 世界的な認知度が高まるから
- 原爆ドームのように残すことで実際の被害を分かりやすくするため。

ベラルーシ派遣で決意 浜通りの高校生結団式

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシに「日本・ベラルーシ友好訪問団2018」として派遣される高校生が16日、広野町での結団式に臨み、本県



結団式に臨む高校生

の復興状況の発信に向け決意を新たにしました。同町のNPO法人ハッピーロードネット(西本由美子理事長)が東日本大震災と東京電力福島第一原発事故からの復興を担う次世代のリーダー育成を目的に、浜通りの高校2年生24人を7月23日～8月3日の日程で派遣する。生徒はチェルノブイリ原発事故から30年以上が過ぎたベラルーシの現状を知り、本県の課題解決へ見識を深める。結団式では、団長を務める西本理事長が「コミュニケーションを取りながら、しっかりと学んで笑顔で過ごしてほしい」とあいさつした。生徒は研修で放射線の基礎知識などを学んだ。

2018年6月17日
福島民友(2面)に掲載

参加高校生発表へ練習



ベラルーシ友好訪問団

いわきで最終説明会

23日出発

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシの現状を学び、県内の復興に役立てる日本・ベラルーシ友好訪問団の最終渡航説明会は16日、いわき市のいわき建設会館で開かれた。参加予定のいわき、ドネット理事長の西本由美子理事長が「今回の渡航が県内の地域作りPO法人ハッピーロードに参加する皆さんの良ききっかけになることを願う」とあいさつした。高校生たちは現地の学生らに東日本大震災の被害状況や地方課題などを題材にプレゼンテーションする予定で、各班がリハーサルを行った。講師役はアドバイザーで立命館大准教授の開沼博さん(いわき市出身)が務めた。訪問日程は二十三日から八月三日まで、子どもの保養施設や企業などを訪問する。派遣は昨年に続き三回目。

2018年7月10日
福島民報(10面)に掲載

ベラルーシと友好を

いわきで訪問団高校生 本県の復興状況発表へ

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシに「日本・ベラルーシ友好訪問団2018」として派遣された高校生は8日、いわき市で開かれた最終渡航説明会に臨み、現地での充実した活動に向け決意を新たにしました。生徒や保護者ら約50人が出席。西本由美子理事長がベラルーシ訪問を通して、素晴らしい古里の実現に向けて考えるきっかけになればとあいさつ。スタッフが訪問中の詳細なスケジュールや準備物を説明した。生徒たちは本県の観光や復興状況など現地で発表する内容を練習し、本番に備えた。ベラルーシへの高校生の派遣は、広野町のNPO法人ハッピーロードネットが震災と原発事故からの復興を担う次世代のリーダーの育成を目的に企画。浜通りの高校2年生24人が今月23日～8月3日の日程でベラルーシを訪れ、チェルノブイリ原発事故から30年以上が過ぎた同国の現状を知り、本県の課題解決へ見識を深める。



ベラルーシ訪問を間近に控え決意を新たにしている高校生ら

2018年7月10日
福島民友(14面)に掲載

ベラルーシ訪問団 結団式

広野 浜通りの高校生、来月出発



西本理事長(左)のあいさつを聞く高校生

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシの現状を学び、県内の復興に役立てる「日本・ベラルーシ友好訪問団2018」の結団式は16日、広野町の二ツ沼総合公園で行われた。NPO法人ハッピーロードネット(西本由美子理事長)の主催で、浜通りの高校生24人が七月二十三日から八月三日の日程でベラルーシを訪れる。現地で子どもの保養施設を見学するほか、学生らと懇談し、県内の現状を報告する。

2018年6月17日
福島民報(2面)に掲載

結団式で西本理事長は「有意義な訪問にするため、メンバー同士が仲良くなって、事前研修に励んでほしい」とあいさつした。訪問団員は次の通り。
坂本穂香、荒彩乃、伏見若菜(新地高)小野内舞、酒井郁登(相馬高)佐藤真志(相馬東高)金沢舞、真田未夢(原町高)青田美枝(相馬農高)森谷友星、矢口晴夏(ふたば未来学園高)中田葵、中丸朋香、山藤広翔、高瀬優花、小松晃二、園部裕一、山田玲華(磐城高)柴田陽菜、金成李胡、荒川祐人、芳賀力、杉本咲樹(磐城桜が丘高)若松桜花(平土高)



ベラルーシに向けて出発した訪問団

高校生24人 復興に生かす

ベラルーシ訪問団出発

日本・ベラルーシ
友好訪問団
NPO法人
ハッピーロードネット

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシを訪れる「日本・ベラルーシ友好訪問団」が23日、成田空港からベラルーシに向けて出発した。浜通りの高校生24人が8月3日まで、本県の課題解決へ見識を深める。

NPO法人ハッピーロードネット(広野町、西本由美子理事長)が、東日本大震災と東京電力福島第1原発事故からの復興を担う次世代のリーダー育成を目的に派遣する。2016(平成28)年から毎年派遣しており、3回目となる今年、首都ミンスクや放射性物質による汚染被害が深刻だったゴメリ州などを訪問。生徒が本県復興の状況を発信するほか、現地の生徒と交流する。

出発式が楡葉町の道の駅ならはで行われ、団長の西本理事長が「笑顔で学んできましょう。復興を遂げた国を見て、将来の地域づくりに生かしてほしい」とあいさつ。生徒を代表して中田葵さん(磐城高)が「一回り成長して帰ってきますと決意を述べた。福島民友新聞社から辺見祐介ふたば支局長が同行取材する。

2018年7月24日
福島民友(3面)に掲載

ベラルーシに到着 浜通りの高校生、首都ミンスクに



ベラルーシに到着した友好訪問団

「ベラルーシ・ミンスク」で田代真久本社整理部記者、チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシの現状を学び、本県の復興に役立

2018年7月25日
福島民報(3面)に掲載

程で企業や子どもの保や日本文化を紹介する。養護施設訪問、学生とのプレゼンテーションを。懇談、本県などの課題。行う予定。

首都ミンスクに到着 発表に備え生徒ら練習

発表に備え生徒ら練習

日本・ベラルーシ
友好訪問団
ハッピーロードネット

「ベラルーシ」ふたば支局長・辺見祐介、チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシを訪れる「日本・ベラルーシ友好訪問団」は24日午後(日本時間同日夜)、同国の首都ミンスクに到着した。



ミンスクに到着した高校生

2018年7月25日
福島民友(3面)に掲載

ゲーム制作会社 見学 社長「復興へ多くを学んで」



ビクトル社長(右)と懇談する高校生

「ゲーム・ストリーム社」を見学した。在ベラルーシ日本大使館の徳永博基大使が同席した。同社のゲームを楽しんだ後、ビクトル・ノボチャドフ社長と懇談した。ビクトル社長は「私が十二歳の時にチェルノブイリ原発事故が発生したが、ベラルーシは再生を遂げた」と振り返り「福島も復興できると信じている。そのためにも多くのことを学び、実践してほしい」と語り掛けた。

「ゲーム・ストリーム社」を見学した。在ベラルーシ日本大使館の徳永博基大使が同席した。同社のゲームを楽しんだ後、ビクトル・ノボチャドフ社長と懇談した。ビクトル社長は「私が十二歳の時にチェルノブイリ原発事故が発生したが、ベラルーシは再生を遂げた」と振り返り「福島も復興できると信じている。そのためにも多くのことを学び、実践してほしい」と語り掛けた。

2018年7月6日
福島民友(2面)に掲載

ベラルーシ訪問へ 浜通りの高校生 楡葉で出発式

浜通りの高校生 楡葉で出発式



ベラルーシに向けて出発した訪問団
日程は八月三日まで、浜通りの高校生二十四人が参加している。派遣は三回目。子どもたちの保養施設見学や現地学生との交流、本県の課題などを紹介するプレゼンテーションを行う。

出発式は楡葉町の同NPO事務局で行われた。西本由美子理事長があいさつした。参加者を代表して中田葵さん(磐城高)が「現地でしっかり学んでくる」と誓いを述べた。

2018年7月24日
福島民報(3面)に掲載

チェルノブイリ原発の復興に役立っている日本・ベラルーシ友好訪問団は二十三日、成田空港から現地へ向けて出発した。

最先端の技術を体験 世界的ゲーム会社訪問



ノボチャド社長からベラルーシの復興の歩みについて説明を受ける生徒たち

日本・ベラルーシ「友好訪問団」ハッピーロードネット

シを訪問中の浜通りの高校生らでつくる「日本・ベラルーシ友好訪問団」は25日、同国首都ミンスクのゲームソフト開発会社「ゲーム・ストーリー」を訪れ、国際

市場で成長を続ける企業の最先端技術に触れた。

同社は、世界中にファンがいる対戦型オンラインゲーム「ワールド・オブ・タンクス」を開発したとなどで知られる。チェルノブイリ原発事故から29年が経過した同国の現状を学んでいる同訪問団の活動を支援している。

ピクトル・ボチャドフ社長は自身が12歳の時に同原発事故が起きたことを説明し、「年々汚染された地域の範囲は小さくなり、今、私たちは健康に暮らしている。福島も必ず復興を果たせる。行動することが大切だ」とエールを送った。生徒たちは、撮影した写真をその場でマグネットに印刷できるゲームなどを体験し、

2018年7月26日
福島民友(3面)に掲載



書道の魅力を伝える高校生ら50名

書道や折り紙を披露

日本・ベラルーシ「友好訪問団」ハッピーロードネット

「アメリカ」文化局長・辺見祐介、ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生らら約200人が出迎えた。26日は、施設の利用者が郷土に伝わる歌や踊りを披露し、訪問団の生徒は同国の文化を学んだ。

2018年7月27日
福島民友(4面)に掲載

2018年7月27日
福島民友(3面)に掲載



子どもたちに日本文化を紹介する訪問団の高校生



スクリーンニコワ施設長(左)に多機能プリンターを手渡す西本理事長(左から2人目)

日本文化紹介と交流

子ども保養施設を視察

同施設は原発事故直後に整備され、主に被災地域の三歳から七歳までの子どもたちが利用する。年間約六千人が訪れる。医療施設を備え、健康促進活動も行われている。

訪問団は、スクリーンニコワ施設長(左)に多機能プリンターを寄贈した。西本理事長(左から2人目)がスクリーンニコワ施設長に手渡した。同施設はスクリーンニコワ施設長(左)に多機能プリンターを手渡す西本理事長(左から2人目)も贈った。

原発被災対策局長と懇談 メンタルケアなど質問



ルトコフスキー局長(左)と懇談する訪問団

【ベラルーシ・ゴメリ】「ベラルーシ」文化局長・辺見祐介、ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生らら約200人が出迎えた。26日は、施設の利用者が郷土に伝わる歌や踊りを披露し、訪問団の生徒は同国の文化を学んだ。

員会を訪問し、同州チエルノブイリ対策局長ルトコフスキー・ドミトリー局長と懇談した。

同対策局長は州内の原発事故による被災地区の社会保障や定住支援などを担当する部署。

ドミトリー局長は自身の業務を紹介した。訪問団の高瀬優花さん(モリノ市立高2年)が被災地区住民のメンタルケアについて質問すると、ドミトリー局長は「私たちが仕事を通じて『国は被災地区を忘れていない』と態度を示し続けることが何よりのケアにつながると思う」と答えた。

2018年7月28日
福島民報(3面)に掲載

ルトコフスキー局長から復興の歩みについて説明を受ける生徒たち



ベラルーシ復興学ぶ 「正しい放射線知識周知を」

日本・ベラルーシ「友好訪問団」ハッピーロードネット

「ゴメリ」文化局長・辺見祐介、ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生らでつくる「日本・ベラルーシ友好訪問団」は26日、ゴメリ州庁舎でチエルノブイリ原発事故対策局長ルトコフスキー・ドミトリー局長と面会し、同原発事故から復興に向けた歩みに理解を深めた。

同局長は、1986年の同原発事故後、汚染が深刻だったゴメリ州に住む住民の社会保障や健康管理などを担っている。

ルトコフスキー局長は、幼稚園の段階から放射線教育を導入している取り組みを説明。風評払拭に向けては「森のベリーなど、危険な食べ物があるという情報も含め、国だけではなく企業単位でも正しい知識を周知していくことが必要だ」と訴えた。

生徒たちは「原発事故後、健康だけでなく心のケアには取り組んでいたのか」と、積極的に質問していた。

開沼准教授が講演

訪問団にドバイサーとして同行している立命館大学の開沼准教授(いわき市出身)は26日夕、日本時間同日深夜、ゴメリ州の国立ゴメリ大で講演した。

開沼准教授は、28日に二部施設が再開するウイレツジ(橋本、広野町)が原発事故収束の対応拠点とな

った経緯を説明し、「もう一度子どもたちをこの地に呼ぼう」という機運が高まりきれいな姿に戻った」と復興を象徴する事例として紹介。今後の課題として、東電電力福島第1原発の汚染水の取り扱い方を挙げ、「社会的合意を踏まえ、長期的に取り組まなければならない問題だ」と強調した。

2018年7月28日
福島民友(4面)に掲載

放射線対策を説明

現地学校訪れ生徒と交流

日本・ベラルーシ
友好訪問団
ハッピーロードネット

【ミンスク】ふたば支局長・辺見祐介、ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生らでつくる「日本・ベラルーシ友好訪問団」は28日、同国ゴメリ州ホイニキ地区の学校を訪れ、現地の放



現地の生徒と交流を深める訪問団の生徒

うになり、2003年に再開した。学校の生徒や教職員ら約60人が訪問団を出迎えた。学校の放射線研究サークルの子どもたちが、放射線測定器で地元野菜などの放射線量をチェックしている。取り組みを紹介し「自分の手で確認すること、安全だということに自信が持てる」と訴えた。

2018年7月30日
福島民友(4面)に掲載

原発事故後の対策理解

ベラルーシ訪問団



アベリン教授(ゴメリ)と面談

【ベラルーシ・ミンスクで田代真久本社整理部記者、NPO法人ハッピーロードネットによる日本・ベラルーシ友好訪問団は二十七日午後、ゴメリ州のゴメリ大を訪問し、生物学博士のヒストル・アベリン教授からチェルノブイリ原発事故後の同国の取り組みについて話を聞き、理解を深めた。

2018年7月29日
福島民報(2面)に掲載

放射線教育理解深める 現地生徒が研究活動紹介



【ベラルーシ・ゴメリ州で田代真久本社整理部記者、NPO法人ハッピーロードネット

【広野町】による日本・ベラルーシ訪問団は二十八日、チェルノブイリ原発事故による被災地域に情報提供している生徒たちが、日頃の研究活動を訪問団に紹介した。

未来学園高二年生は「自分の古里で安心して暮らすために努力する」と述べた。原発事故の資料を展覧する同世代に強い地元愛を示す地区博物館や、

2018年7月30日
福島民報(2面)に掲載

チェルノブイリ教訓に ゴメリ大で本県復興策探る



訪問団の生徒に講義するアベリン教授

【ゴメリ】ふたば支局長・辺見祐介、ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生らでつくる「日本・ベラルーシ友好訪問団」は27日、同国ゴメリ州の国立ゴメリ大を訪れ、1986年のチェルノブイリ原発事故を教訓に本県復興への道筋を探った。

2018年7月29日
福島民友(2面)に掲載

中で、風化がもたらした地域への「べきだ」との考えを示さない。国は避難指「ケア」をもっと手厚くすべきだ。

原発建設に違和感 経済優先の姿勢に驚き

エネルギーの将来像



アベリン教授（手前）の講義に臨み、チェルノブイリ原発事故に理解を深める中田さん（右から2人目）ら生徒たち

30年後の故郷は

日本・ベラルーシ友好訪問団2018

浜通りの高校2年生24人でつくる「日本・ベラルーシ友好訪問団2018」は7月20日、今日3日、ベラルーシを訪問した。現地の大学や汚染地域を巡り、1986年のチェルノブイリ原発（ウクライナ）事故から32年が経過した現状を学ぶ。将来の本国復興の在り方を探った。

「国内に原発を建設している。来年には稼働する予定だ。チェルノブイリ原発事故に詳しい国立イリノイ大学のレクター・アベリン教授の説明に、訪問団の生徒は言葉を失った。現地では同原発事故による放射能汚染でベラルーシの住民が苦難の道を歩んできた経緯を学んばかりだったからだ。

ともに原発事故による深刻な被害を受けた本県と同国。しかし、同国の事故後の対応について知る中田（さん）16）警城高は「福島とは懸け離れている

と本県との復興の姿勢の違いに驚いた。

同国には、同原発事故により放出された放射性物質の約7割が降り注いだとされる。今約20万平方キロメートルの地域が汚染されている。事故から30年以上が経過しても住民が避難したまま立ち去りが禁止された地域がある。

本県でも、東京電力福島第一原発事故に伴い全町避難が続く双葉、大熊両町をはじめ、富岡町などに帰還困難区域が広がる。第一、第二両原発は福島県内の過半数に達する。同国の経済発展に向けた力強さは感じた。現地の潜在力を通し、原発建設に関する体制や経済、国民性が「なぜ苦しみ続けたはずの原発を建設するのか。日本と異なる」とは十分に理解を深めたつもりだ。

アベリン教授の答えは明快だ。「安定した電力の供給は経済効果が大きく、国民の生活水準を向上させるからだ」。

歓迎ムードさえも漂う原発建設に、中田さんは「過らざる

去決別しても前に進んでいく印象を持った」と同国の経済発展に向けた力強さは感じた。現地の潜在力を通し、原発建設に関する体制や経済、国民性が「なぜ苦しみ続けたはずの原発を建設するのか。日本と異なる」とは十分に理解を深めたつもりだ。

アベリン教授の答えは明快だ。「安定した電力の供給は経済効果が大きく、国民の生活水準を向上させるからだ」。

歓迎ムードさえも漂う原発建設に、中田さんは「過らざる

2018年8月5日
福島民友(2面)に掲載

自分の目で見てほしい

30年後の故郷は

日本・ベラルーシ友好訪問団2018

牛を連れたトラクターがゆっくりと走り、青々とした芝生では子どもたちが歓声を上げて走り回る。「事故直後のままだと思っていた」。山藤（さん）17）警城高はベラルーシ南部のゴメリ州ホイニキ地区に広がるような風景を見ると、危険なという先入観が払拭された。

同地区は、一部が事故を起したチェルノブイリ原発（ウクライナ）から30キロ、民が避難し、51の村が地図圏内に含まれ、国内でも特に汚染が深刻だった地域。国は放射線量を低減させ、当時2万人以上の住



ホイニキ地区博物館で被害から復興までの道のりを学ぶ山藤さん（前列左から3人目）ら生徒たち

風評払拭

化や給与待遇措置など人口回復を目指す政策を次々に打ち出した。近隣の力強いスタンから移住者が相次ぐなど、かつての日常の風景を取り戻している。生徒たちは事故の記憶を伝え、復興の道りを学んだ。1991年に同地区のトリリチェボ中学校も閉鎖し追いつけなかったが、移住者の増加で2003年に再開した。「知識があるから」。山藤さんは、本県の実情を知ってもらうために心砕きたいと考えている。

は放射線について学びながら地域に根を張って生活している姿を伝えた。

「情報を発信するだけではなく、実際に自分の目で現状を見てもらうことが大切じゃないか」。山藤さんは風評払拭に向けて、本県へ足を運んでもらうための工夫が必要だと感じた。将来の夢は外交官。福島第一原発の廃炉には30年かかると、風評との闘いは長期化する見通しだ。

「僕たちが学んだように、海外の子どもたちが薬師に追いつけなかったが、移住者の増加で2003年に再開した。『僕たちが学んだように、海外の子どもたちが薬師に追いつけなかったが、移住者の増加で2003年に再開した。』山藤さんは、本県の実情を知ってもらうために心砕きたいと考えている。

2018年8月6日
福島民友(2面)に掲載

大使館の講話熱心に

訪問団 交流事情を理解



ベラルーシ大使館での講話の様子

「ベラルーシ・ミンスクで田代久木社理部長記者NPO法人ハッピーロードネット（広野町）による日本・ベラルーシ友好訪問団は一日午前（日本時間同日午後）、ミンスクのプラネータホテルでベラルーシ大使館を訪ねた。

大使館では、訪問団のメンバーが、日本の事情やアニメも人気でイベントも盛んだと近年の両国間の交流事情を解説した。訪問団は外交官の仕事に関心をもち、「外国語習得の秘訣（ひけつ）」はな

でベラルーシ日本大使館の徳水博喜大使の講話を聞いた。

徳水大使は「ベラルーシを訪問する日本人が増えている。日本の事情やアニメも人気でイベントも盛んだと近年の両国間の交流事情を解説した。訪問団は外交官の仕事に関心をもち、「外国語習得の秘訣（ひけつ）」はな

一行は三日に帰国する。

2018年8月3日
福島民報(2面)に掲載

日本・ベラルーシ友好訪問団

ハッピーロードネット

訪問団帰国へ

【ミンスク】ふたば支局長・辺見祐介「ベラルーシを訪問中の浜通りの高校生をつくる『日本・ベラルーシ友好訪問団』は2日午後日本時間同日夜、全日程を終え帰国の途に就いた。生徒たちは、観光再生や新産業の創出など本県の復興の状況を発信したほか、1986年のチェルノブイリ原発事故で汚染されたゴメリ州を視察するなど、事故から32年が経過した同国の現状に理解を深めた。



全日程を終えた生徒ら

2018年8月3日
福島民友(4面)に掲載

現地の実情を学び帰国

10月8日 Jヴィレッジで報告会



帰国した友好訪問団の高校生

二十三日に出国し、現地でベラルーシの汚染地域や福島第一原発事故の被災地を視察し、現地の実情を学ぶ。報告会では、現地学生らと交流し、成長できたと思ふ。報告会を開催する。

「現地では、福島第一原発事故の被災地を視察し、現地の実情を学ぶ。報告会では、現地学生らと交流し、成長できたと思ふ。報告会を開催する。」

2018年8月4日
福島民報(2面)に掲載

30年後の故郷は

日本・ベラルーシ
友好訪問団2018

「事故直後のまま停滞している」。訪問団の現地通訳を務めたベラルーシ国立大のアリーナ・シバエワさん(20)は、多くの国民が本県を抱いているイメージを代弁した。本県への関心を引き寄せるために海外でも通用するアピール技術を磨こうと、生徒たちは挑戦を続けた。

渡航前から、現地訪問の集大成として本県の現状を伝える発表会に臨むことが「観光」「産業」の五つ。

「福島を今」をさまざまな角度から発信する試みだ。「この経験を後世に伝えるべく、生徒たちは被災した体験を踏まえ、感情を込めて身ぶり手ぶりで本県の現状と魅力を伝えた。「懸命に復興に歩んできた姿や福島の良い風景が目についた。必ず訪れたい。」

心に響く伝える力



ベラルーシの大学生や住民に福島のことを伝える酒井さん(左側手前)ら

本県の魅力発信誓う

「生徒たちが6月から発表の準備を進める中で、訪問団のアドバイザーで原発と社会の関係に詳しい立命館大の開沼博准教授から「伝える」として難しい。でも確かに届いた。割れんばかりの拍手が響く中、酒井郁澄さん(17)相馬高帯在中も生徒たちは連日深夜まで内容の改善に向けて試行錯誤を繰り返した。迎えた本番。会場となった首飾ミンスク中心部のホテルは、現地の大学生や住民で埋め尽くされた。元原発事故の記憶を継承し、本県の魅力を広く発信していく決意を胸に刻んだ。(ふたば局・辺見祐介)

2018年8月7日
福島民友(2面)に掲載

汚染が深刻だったホイニキ地区にある学校では、生徒自らが食品の放射性物質を測定している取り組みを学んだ=7月28日、ゴメリ州ホイニキ地区



汚染地域に住む子どもたちが利用する保養施設「アラレスカ」では、浴衣の着付けなど日本文化を発信した=7月25日、ゴメリ州



日本・ベラルーシ
友好訪問団
ハッピーロードネット

未来につなぐ絆



原則立ち入りが禁止されているポレーシエ放射線環境保護区の境界を訪れる生徒。チェルノブイリ原発事故の深刻な被害を肌で感じた=7月28日、ゴメリ州

2018年8月7日
福島民友(12面)に掲載



ショッピングモールでは大熊町で受け継がれてきたよさこいソーラン踊りを披露した=7月31日、ミンスク

ふくしまは負けない明日へ

題字は石井雄基君
(田村市・大越小5年)

ベラルーシ訪問の高校生

復興体制の違い考える

七月二十四日から八月二日にかけてベラルーシを訪問したNPO法人ハッピーロードネット(広野町)の「友好訪問団」はチェルノブイリ原発事故直後の被災した国の現状を学んだ。

「日本が復興体制を三〇〇年で閉じってしまうのは理解できない」。席上、ベラルーシの高校生は「出発前は不安げな表情をしていた子どもたちが帰ってくる頃には、目つきも変わり、別人のようだった。プレゼン作成などを通して成長してきた証拠だ」と語り、

友好訪問団長 西本由美子さん
現地での経験語って

「現地の高校生たちが放射線教育について学んだ。『現地の学校で見た放射線教育が日本でも利用できることは多々あったと思う。まずは友人たちに現地での経験を自分の言葉で語るから啓発を始めてほしい』」

ソーラン節で文化交流



現地の子どもたちとソーラン節を踊る訪問団(ゴメリ州ホイニキ地区ストリチエボ中高等学校)

「ソシの手法を応用できるのでは」と感想を語った。一行は文化交流にも取り組んだ。大熊町の町民体育祭で大熊中が毎年披露していた「ソーラン節」を各地で披露した。上演はゴメリ州の子ども保養施設、同州ホニキ地区のストリチエボ中高等学校、ミンズクの大型ショッピングセンター「ダオモール」の3カ所で行った。

2018年8月16日
福島民報(20面)に掲載

ベラルーシの感想報告

いわき市長に高校生11人

日本・ベラルーシ友好訪問団に団員として参加したいわき市の高校生らが20日、市役所を訪れ、清水敏

男市長にベラルーシ訪問での感想などを報告した。訪問団は7月23日〜8月3日に同国を訪問。現地の企業や大学、博物館、史跡などを巡ったほか、チェルノブイリ原発事故以後の現地の取り組みについて学んだ。

市役所を訪れたのは、磐城高、磐城桜が丘高の2年生11人。磐城桜が丘高の芳賀力さん(16)が、同国の少年少女たちとの交流や国立ゴメリ大で受けた講義などについて写真を交えて紹介。生徒らは「海外との文化の違いに触れ、いい経験になった」「原発事故に対する考え方の違いは興味深かった」と振り返った。



清水市長(前列中央)を表敬したベラルーシ友好訪問団の高校生ら

2018年8月24日
福島民友(13面)に掲載

高校生ベラルーシ訪問団
市長に活動報告 いわき

NPO法人ハッピーロードネット(広野町)が主催する日本・ベラルーシ友好訪問団に参加した高校生は二十日、いわき市役所を訪れ、清水敏男市長に活動内容を報告した。

市内の高校二年生十人と副団長の桑折淳さん、事務局長の山崎建児さんが訪れた。生徒を代表して芳賀力さん(磐城桜が丘)が現地での活動を報告した。参加者は「原発事故に対する考え方の違いに驚いた」「言葉の壁はあったが、心が通じ合ったと思う」などと感想を述べた。



現地での活動を報告する芳賀さん(中央)

2018年8月27日
福島民報(14面)に掲載

町長に成果報告
ベラルーシ訪問の
新地高校生2人

1人を訪問した新地高の荒彩乃さん(二年)と坂本穂香さん(二年)は四日、新地町役場で加藤憲昭町長に成果を報告した。

荒さんは「ベラルーシと福島の違いや共通点を見いだせた。現地の人との交流が楽しかった」、坂本さんは「貴重な経験を積むことができた」と感想を述べた。友好訪問団長の西本由美子さん(NPO法人ハッピーロードネット理事長)と一緒に訪れた。

七月下旬から八月月上旬にかけて浜通りの高校生がベラルーシを訪問し、チェルノブイリ原発事故で被災した同国の現状などを学んだ。



加藤町長に成果を報告する荒さん(左手前)と坂本さん。右は西本

2018年9月6日
福島民報(11面)に掲載

ベラルーシで貴重体験



加藤町長等に訪問の成果を報告した荒さん(左から2人目)と坂本さん(同3人目)

本年度の日本・ベラルーシ友好訪問団に団員として参加した新地高の荒彩乃さん(二年)と坂本穂香さん(同)は四日、新地町役場を訪れ、加藤憲昭町長に訪問の成果を報告した。

荒さんは「日本の挑戦をテーマにロボット産業などを発表した」、坂本さんは「折り紙を通して子どもたちと交流した。日本の文化を発信できた」と報告した。

2人は、訪問団が10月8日にJヴィレッジ(栃木、広野町)で開く同国訪問の報告会についても説明。加藤町長は「世界を見て視野を広げることが大きな財産になる。今後に生かしてほしい」と激励した。

訪問団長で広野町のNPO法人ハッピーロードネット

2018年9月6日
福島民報(11面)に掲載

高校生2人、訪問の成果 新地町長に報告

下の西本由美子団長と同校教師の高村泰広副団長が行った。

訪問団は、団員の浜通りの高校2年生24人が7月23日～8月3日まで同国を訪問。現地の企業や大学、博物館、史跡などを巡ったほか、チェルノブイリ原発事故以後の現地の取り組みについて学んだ。

2018年9月8日
福島民報(3面)に掲載

ベラルーシ訪問団
榎葉で来月報告会

チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシを訪れた「日本・ベラルーシ友好訪問団」の報告会は10月8日午前10時から、榎葉町のJヴィレッジコンベンションホールで開かれる。入場無料。NPO法人ハッピーロードネット(西本由美子理事長)の主催。

訪問団には浜通りの高校生24人が参加し、7月23日～8月3日にベラルーシを訪れた。報告会では、参加者が現地での経験などを報告し、ベラルーシ国立大生が同国から見た日本について紹介する。「記憶の継承」「リーダーシップ」についてのパネル討論も行う。問い合わせは同NPO



法人(電話0240・23・6172)へ。
西本理事長は7日、報告会開催あいさつのため福島

来月Jヴィレッジで報告会

8日

広野町のNPO法人ハッピーロードネットによる「日本・ベラルーシ友好訪問団2018」の報告会は、十月八日午前十時からJヴィレッジ(栃木・広野町)のコンベンションホールで開かれる。

訪問団には浜通りの高校生二十四人が参加した。七月下旬から八月月上旬にか

榎葉のハッピーロードネット
ベラルーシ訪問団

報告会をPRする西本理事長



浜通りの高校生24人

した。報告会では訪問団の高校生とベラルーシ国立大生による発表、「記憶の継承」「リーダーシップ」をテーマにしたパネルディスカッションなどを繰り広げる。入場無料。

ハッピーロードネットの西本由美子理事長は七日、報告会開催PRのため福島民報社を訪れた。訪問団長を務めた西本理事長は「高校生はベラルーシで大きな成長を遂げた。報告会の発表テーマは子どもたちが決めた。ぜひ成果を見に来てほしい」と語った。

2018年9月8日
福島民報(2面)に掲載

浜街道

◆「現地の人との交流が楽しかった」と振り返るのは新地町の新高二年の荒彩乃さんです。今年夏、NPO法人ハッピーロードネット(広野町)の友好訪問団でベラルーシを訪問しました。研修活動を通じ「ベラルーシと福島の違いや共通点を見いだせました」と成果を得たようです。

2018年9月11日
福島民報(12面)に掲載



復興に必要なリーダーシップについて発表する生徒たち

震災の記憶継承に提言

ベラルーシ訪問団 高校生が報告会

「実際に震災の揺れを体験できるコーナーを設けるべきだ。ふたば未来学園の森谷友直さんは、震災が起きた際に、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校が丘高の森谷由陽菜さんは「震災をどうしのり、食糧物資をどう配ったのかを再現した施設も必要だ」と避難生活を体験できる施設の設置を提案した。

ベラルーシで生徒たちはゲームの国際市場で成長を続ける企業のトップや行政の女性幹部職員らと面会し、リーダーの在り

揺れや避難生活の体験を

「実際に震災の揺れを体験できるコーナーを設けるべきだ。ふたば未来学園の森谷友直さんは、震災が起きた際に、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校が丘高の森谷由陽菜さんは「震災をどうしのり、食糧物資をどう配ったのかを再現した施設も必要だ」と避難生活を体験できる施設の設置を提案した。

報告会には行政関係者ら約100人が訪れ、中でも県職員は「参考になりました」と熱心にメモを取っていた。来場した県相及地方振興局の佐々木三局長は「自身の考えをまとめる力が身に付いている方について提言は胸に突き刺さった」とたたえた。

（ふたば支局・辺見祐介）

「実際に震災の揺れを体験できるコーナーを設けるべきだ。ふたば未来学園の森谷友直さんは、震災が起きた際に、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校の中田葵さんは震災直後の企業CMの自虐に笑い、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校が丘高の森谷由陽菜さんは「震災をどうしのり、食糧物資をどう配ったのかを再現した施設も必要だ」と避難生活を体験できる施設の設置を提案した。

「実際に震災の揺れを体験できるコーナーを設けるべきだ。ふたば未来学園の森谷友直さんは、震災が起きた際に、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校の中田葵さんは震災直後の企業CMの自虐に笑い、緊急に放送されていたA.C.ジャパン（東京）の公共CMが印象深かった経験がきっかけになる」と訴えた。磐城校が丘高の森谷由陽菜さんは「震災をどうしのり、食糧物資をどう配ったのかを再現した施設も必要だ」と避難生活を体験できる施設の設置を提案した。

2018年10月10日
福島民友(4面)に掲載

『日本ベラルーシ友好訪問団 2018』を開催するにあたりまして、多くの皆様からご協力いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

ご協力いただいた皆様

※順不同・敬称略

【協賛企業・団体】

- 前田 JV グループ
- たまきはる福島基金
- 浜通り交通株式会社
- 一般社団法人日本電気協会新聞部（電気新聞）
- 株式会社報徳バス
- 前田建設工業株式会社
- 株式会社タイズスタイル
- 横山建設株式会社
- 株式会社タイヘイドライバースクール
- 株式会社加地和組
- 常磐共同ガス株式会社
- 清水建設株式会社

【協力（企業・団体・個人）】

- 在ベラルーシ日本国大使館
- 復興庁
- 広野町
- ホテルハタゴイン福島広野
- いわき教育事務所
- 相双教育事務所
- 福島県立桜が丘高等学校
- 公益社団法人福島相双復興推進機構
- 東京電力ホールディングス株式会社
- 株式会社千代田テクノル
- ゴメリ州執行員会
- 小児リハビリ保護センター「ブラレスカ」
- 国立ゴメリ大学
- 放射線学研究所
- ホイニキ地区執行委員会
- ストレリチェボ中学校
- ホイニキ地区博物館
- ゲームストリーム社
- ベラルーシ国立大学
- 大楽院（楢葉町）
- 広野昇龍太鼓（広野町）
- 長谷川 純一郎
- 市川 英樹
- 坪倉 正治（相馬中央病院非常勤医師 ひらた中央病院非常勤医師）

【取材協力】

- 福島民報社
- 福島民友新聞社



学園成長を祝った生徒たち

浜通り高校生 ベラルーシ訪問団

現地での成果報告

浜通りの高校生は、ベラルーシのJウイレッジで開かれた報告会に、訪問の成果を発表した。

原発事故後の復興に意見

ベラルーシ訪問団の高校生は、現地での学習と交流の様子を、報告会に紹介した。学

2018年10月10日
福島民報(15面)に掲載